モビルスーツに乗りたかった喰種捜査官

haregreat

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ニュータイプ的直感持ちが東京喰種の世界で縦横無尽に活躍するお話。

小説を初めて書いてみました。ご意見ありましたらお願いします。

※短編から連載にしました。

一応１０話程度でまとめたいと思います。

目次

プロローグ ―― 1
第1話　安室大地に立つ ―― 14
第2話　地上勤務命令 ―― 37
第3話　喰種の喰場を叩け！ ―― 50
第4話　喰種漸減作戦 ―― 65
第5話　4区突入 ―― 84

プロローグ

プロローグ　1

東京都某所

廃工場近くの高台にて深夜に二人の男が工場の全貌を眺めていた。二人はどちらもスーツに白いビジネスコート。両手に白いケースを持っており、町で見かければ、ケースを2つも持ち歩くことを除いて全く違和感を感じることはないだろう服装をしていた。その一人である４０近くだろうか。僅かに猫背の男が、元から不気味である顔を更に不気味な笑顔にして嬉しそうにしていた。一般人が見たらすぐにも警察を呼ばれかねない顔、本人は満面の笑顔のつもりなのだろう。そんな顔をして隣にいる部下らしき男に話しかける。

「安室一等捜査官準備はいいかね」

相変わらず不気味な笑顔をし、深夜なことも相まって、その顔をみれば一般人であれば恐怖でまともな返答ができないだろう。しかし話し掛けられた安室一等捜査官と呼ばれた２０代半ばの男は特に物怖じせず、軽く返答を返す。

「真戸上等。いつでもいけますよ。すぐにでも。」

そう返答を返す赤茶けた髪色に１７０程度の身長。僅かに幼さが見える童顔に整った顔の若い男性。安室一等捜査官と呼ばれた彼も不気味さは無いものの深夜の廃工場近くでするには全く場違いな満面な笑顔をしながら、静かにしかしやる気に満ちた声音で一拍置かずに即答をする。

「どうやら、準備もやる気も充分なようだね。」

「では、喰種（グール）どもを駆逐しにいこうか。」

返答に対して安室の上司であろう真戸上等と呼ばれた男は返された返事に満足し、まるでこれから遠足にでも行くかのように喜色を帯びた声で物騒な言葉を投げ返し、両手に1つずつ大きめな白いケースを手に持って、軽い足取りで廃工場に足を向けた。その行動に合わせ部下の若い男も同様のケースを両手に持ち、上司の後に続いた。

そして、返事を期待したものではなく、これから向かう場所にいる

だろうグール達に期待を込めて呟く。
「あー。ガンダムっぽいカグネ持ちいねぇかな」
そんな訳がわからない呟きを残し、男は足早に上司に並走するような位置に着き、二人は目的地に向かって歩きだした。

二人が向かった先は工場の裏口にあたる場所。工場が稼働していた頃はトラックの搬入口になっていたことが想像される。
二人は入口周辺に見張りがいないことを確認し、真戸と言われた男が先頭となり、周りを警戒しつつ内部に侵入した。
侵入を果たした二人が通路を音を立てず歩いていると通路沿いの部屋から物音と人の話し声が聞こえた。
二人はゆっくりと扉に近づき中の様子を探る。
内部ではグールだろう3人が喋りながら、食事の最中であった。グールが食べれる物は限られる。
そう、グールが食べることができるのは人のみだ。であれば今グール達が何を食べているか、二人にはすぐに想像がつき、表情には出さないものの二人は嫌悪感と不愉快な雰囲気を露にした。
真戸上等はハンドサインで安室一等に合図すると真戸上等はゆっくりドアを開ける。ドアの先には大きな棚があり二人とグール達との視界の壁となり、グール達は誰が来たのかすぐに分からなかった。
「なんだ?ほとんど食っちまって余りなんざねぇぞ」
一人のグールが扉の方向を見もせず、仲間の誰かが腹を空かして肉をせびりに来たのかと思い、来訪者に適当に言葉を投げる。

「いや、結構。我々の口には合わなくてね。」
そんな返事が返って来たときグールは返答に疑問を抱き目線を扉に向ける。その目に映ったのは真っ黒のボーガンを自らに向ける見知らぬ人間であった。
「ＣＣＧ!」
目線を向けたグールはすぐに侵入してきた男が何者かを悟る。

白いコートにスーツ姿。そして箱持ち。
グールを駆逐する為の組織がＣＣＧであり、その者達が持つ武器は容易にグールの硬い皮膚だろうが貫き、切り裂く。
そんな記憶が頭の脳裏に横切り、大声を出すと同時に体を動かそうとした。しかし男が向けたボーガンからは既に同様の黒い矢が射出されており、丁度声を上げようと大きく開いていたグールの口にゆっくりと吸い込まれていった。矢はグールの口に突き刺さり、頭蓋を砕き矢はグールの頭に突き刺さった。恐らく、今の一撃で頑丈なグールでも即死か致命傷のどちらかの結果を与えていただろう。しかし更に追い討ちをかけるように刺さった矢はグールの血中に多く含まれるＲｃ細胞に反応し、矢につけられていた小さな返しが勢いよく大きく形状を変化させたことで、グールの頭が内部から破裂するかのようにして破壊される。
仲間のグール二人が視界を扉に向ける頃には丁度矢がグールの頭を破壊する所でありその破片が仲間のグール達に降りかかる。残りの二人が今の状況を理解するまで一瞬ほど固まりすぐに外敵から身を守ろうとしグールの補食器官であるカグネを展開しようとした。しかしこの場でその行動はあまりに遅すぎた。瞬間、男が入ってきた入口から更にもう一人の男が現れグール達の目前まで迫っていた。その男である安室は接近と同時に対グール用武器であるクインケを展開する。手に持っていたケースは瞬く間に形状を変えいわゆる薙刀へと形を変化させ、その間合いに入ったグールを有無を言わさず、頭を凪ぎ払った。
更に攻撃を止めず、安室一等は初撃の勢いを利用し、薙刀を勢いよく半回転させ、柄の反対側にもつけられた刀身によって側にいたもう一人のグールの頭をも、初撃同様に凪ぎ払い、一瞬によりグール２体を頭の無い死体に変えて見せた。そのクインケ操術はまさに達人技であり一等捜査官クラスではトップの能力であることは間違いないだろう。その一連の殺戮劇をみていた真戸上等捜査官も１年近くその動きを見ているとはいえ、僅かの間その動きに見惚れた程だ。準特等いや特等クラスでも通じる。安室一等を真戸上等は内心そう評価

していた。
そのように真戸上等にしては珍しい最上級の評価を頂いた安室一等は、内心では「な～んてお上手なんでしょ。僕っ！」
などと自らの動きに自惚れていたりするのだが、今部屋でそれに気がつく者は誰もいなかった。

二人は、目の前のグールを一瞬で片付けると他に敵がいないか周囲を警戒する。
しかし部屋の中は元から補食された人間の血と更に3体分の血が部屋一面に降り注いだことから正しく血の雨が降り注いだような景観と化しており、男2人を除けば生者がいるような雰囲気はまるでなかった。
そのような状況を作り出した二人は残敵がいないことを確認すると、クインケの血を払ったり、新たな矢を詰める等して次の戦闘の準備に取り掛かった。
「気づかれましたかね？」
安室一等が真戸上等に小さな声で話しかけた。
「いや、扉も閉めていたしそこまでの声ではなかった。大丈夫だろう。先程の食い散らかす音と話し声の方がよっぽど周囲に響いていた気がするよ。」
真戸上等はグールの頭を足蹴にして愉悦の籠った声で返答する。顔は歪んだ笑顔であることは言うまでもないだろう。
「さぁ、夜はそう長くはない。さっさとここの家主に挨拶しに行くとしよう。」
そう踵を返し更に工場の中心部へと足を向ける。
安室一等もそれに習い、後ろに続く。
「なんか、下っぱを見る限り上も思ったほどではなさそうですね」
部屋を出る前に安室一等が軽口を溢す。
「油断はやめたまえ。あの害虫共は生き汚い。君も下手をすれば、足元を掬われるぞ。」
真戸上等はそう返し、自らの部下に軽く叱責する。

そして、更に真戸は言う。
「通称巨腕　Ａ＋～の判定をつけられているが私の勘では、Ｓレートに届くだろう。Ｓ＋やＳＳには届かないだろうがね。しかし決して油断していい獲物ではない。久々の大物だ。確実に仕留めよう。」
「真戸上等の勘がそう思うんなら、そうなんだろうなぁ。つか、今回のグールの特徴的にクインケにしても自分好みの作れなそうなんですよね。」
血だらけの惨場を気にもせず、二人は会話を続けるが、部屋を出れば、先程の弛緩した空気はなくなり二人の空気は刃物を想像させる鋭く冷たい雰囲気に瞬く間に変わる。そうして二人は工場の中心部へと足を向けた。

二人の捜査官がグールの根城である廃工場に侵入した頃、その根城の主であるグールは工場の中心部、元は組み立てスペースだったのだろう広い空間に一人佇んで、苛立っていた。ここ最近白鳩（ＣＣＧのこと）の活動がかなり激しくなっており、自らの狩場を荒らされ、相当数の部下が餌の人間を狩ろうとして、逆に狩られ続けているのだ。
つい最近では、自らに次ぐ実力を持った組織のＮｏ．２とも言うべき存在も狩られ、組織の活動がままならぬ状態になりつつある。
人数も多かった時は５０人近くはいた構成員も狩られるか逃げ出すかして、今では２０に届くかどうかの有り様だ。
実力も精々がカグネを出して振り回す程度の者しかいない。
実力者もいたが、どういう訳か優先して狩られ、今まともに白鳩の箱持ちを相手にできるのは自分だけなのではないか。
そんな鬱々とした感情がこみ上げ、そしてこんな状況に落としこんだ白鳩に対しての怒りが前者以上に身体中に沸き上がり、近くにあった鉄屑を握りつぶし、脇にあるドラム缶を数ｍ先まで蹴飛ばした。
そして、物に鬱憤をあたり散らし、しばらくして気持ちを落ち着かせ、まずは食料調達をどうにかしないといけない。そうした現実問題

をようやくまともに考えられるようになった時、何か入口に気配を感じた。
部下の誰かが来たのか？
まず、第一に当たり前のことを思い付く。しかし扉からは異様に血の匂いが漂ってくる。
その異常を感じとりグールは大声を出す。
「誰だ！・さっさと入ってこい！」
声を出し、扉の向こう側に間違いなくいる誰かに問いかけるが、数秒たっても入ってくる様子がない。
苛立たしげにもう一度声を張り上げようとした瞬間、扉がゆっくりと、開け放たれる。
果たして、何者か。恐らく部下ではない。グールのリーダーはそう予感した。
そして、入ってきたのは白いコートにスーツ姿。両手にケースを持つ不気味な笑顔をこちらにむける男ともう一人も不気味さはないものの、この場に全く似合わない純粋な笑顔をこちらに向けた男２人組であった。
その外見の特徴は間違いなく唯一、グールの天敵であるＣＣＧに他ならなかった。

真戸上等と安室一等は３人のグールを部屋にて始末した後、軽い足取りで、順調に目的地の工場中心部に向かっていた。以前捕らえたグールの情報でグールのリーダーは好んで中心部にいることが多いと聞かされていたからだ。
中心部に向かう最中に何回かグールに遭遇することがあったのだが、通路には、一人で見回るグールばかりであり、真戸上等のボーガンの形をしたクインケで一瞬で葬りさられるだけであった。一度だけ二体のグールと遭遇したが、安室一等の「この先から２つプレッシャーが迫ってきてる感じがするので物陰に隠れて奇襲しましょ

う。」等という意味不明な発言があり、そのような発言に馴れている真戸上等は了承し、物陰に隠れ安室一等が言ったように近づいてきたグール二体を奇襲することで瞬殺し、問題なく進んでいった。途中の部屋で寝ていたグールもわざわざ殺し回っていたのは余談だろう。

二人は特に騒ぎを起こすこともなく、中心部の組み立て場の入口であろう観音開きの大きな入口を見つける。

真戸上等は長年の経験により磨いた直感が間違いなくこの扉の先に目標である巨腕のグールがいることを確信する。

安室一等もこの世界に生まれた時に与えられた能力により、敵の親玉がいることを察知する。

お互いに目を合わせこの先にいるだろう敵が目標であると、目で告げると考えが一致していることに気づき二人は口元に笑みを作る。ペアを組んでから二人の勘が一致した時の勘は今まで一度も外れたことがないのだ。

そうして二人同時に扉を開け放とうとした瞬間、中から大声が放たれた。

「誰だ！」

二人は一瞬固まり、もう一度目を合わす。

お互いの笑みは更に増しており、お互いに笑いだすのを堪えるようにしてゆっくりと扉を開いた。

凶悪な笑顔をした真戸上等はこれから殺せるグールをいかにして、どのような苦痛をもって殺してやるか想像しながら。

安室一等は扉越しからでも気配に気付けたグールは想像以上の能力を持っているのではないか。自分が理想とするクインケになってくれるのではないかと想像しながら。

そうして、ようやく二人は今夜の目標としていたグールに相対した。

相対したグールは身長は１９０㎝はありかなりの筋肉質。黒のタ

ンクトップにジーンズという格好。顔にはサングラスを身に付け頬には目元から顎にかけて傷痕が見える。一般人は絶対に近づきたくない姿をしていた。
「身体的特徴とその頬の傷痕。間違いなく駆逐対象である巨腕のグールと判断する。駆逐させてもらおう。」
真戸上等がそう言い放ち、両手に持っていたクインケを武器の形に変えていく。右手には銀色のレイピアが。左手には先程まで活躍していた黒いボーガンが姿を現す。
「見せて貰おうか。巨腕と呼ばれるグールの実力とやらを」

それに続けて安室一等もキャラ違いの発言をしながら両手に持つクインケを展開する。右手には柄の両側に刀身があり、両側の刀身を含めても安室一等の身長と同じ程の黒い薙刀が。左手にはパーティー用のクラッカーに似た形をした使用用途が見た目では全く不明な武器がそれぞれ安室一等の腕に収まっている。

それを見た。巨腕と呼ばれるグールが両側の肩甲骨からカグネを露にし、カグネを両手に纏わせることで巨腕の名に恥じぬ５ｍ近い２本の巨腕が顕になる。また腕の先には指を模倣しているのか、５本に枝分かれしたカグネも確認できた。
「たかが白鳩二人で俺の前に姿を現した勇気は買ってやる。だが白鳩なんざいくらでも殺してるんだよ！」
巨腕のグールがそう言い切ると同時に間合いを詰め、全力で右腕を横凪ぎする。
目にも止まらぬ速さで振り抜かれた腕に常人であれば上半身と下半身の２つが泣き別れしていただろう。しかし歴戦のベテラン捜査官である真戸上等と生まれ持った特殊な能力を持つ安室一等にとっては、ただの力任せの攻撃でしかなく、二人は余裕を持って上体だけを前に倒してかわす。
そしてかわすと同時に真戸上等は巨腕のグールの右側に回り込み、安室一等が左側に回り込むことで、阿吽の呼吸でグールを挟みこむよ

うにしてお互い移動する。真戸上等が回り込みつつ黒いボーガンをグールに向けその胴体に矢を放つが自らの左腕を盾にすることで攻撃を防ぐ。しかし矢はただの矢などではなく左腕に突き刺さると同時に大きく形状を変えカグネの動きを阻害した。

「くそが!!」

巨腕は予想外の痛みと左腕が異物によりまともに動かせなくなったことによる煩わしさに思わず相手を罵るが、挟み撃ちにされる現状はあまりよく無いと冷静に判断し、その巨体からは想像できない機敏さで後ろに下がり距離を取る。距離を取る際にも先程の矢が飛んで来ないか注意していたが、どうやら先程のは一発のみだったらしく、射手である捜査官はボーガンを投げ捨てレイピアを持ちこちらに突貫してくる様子だった。

武器が減れば更にこちらに有利になる。そう思いもう一人に目をやる。もう一人の若い男は相変わらず回り込もうとし、こちらの視界に同時に二人を写さないよう嫌な立ち回りをしてくる。

その状況から、今までの捜査官とは違うと判断し、敵に応援が来ないとも限らない。

捜査官がここまで来ているということは、こちらの仲間は当てにできない。そう考え巨腕のグールは一瞬で決断する。

正面から向かってくる人間を巨腕2本を用いて瞬殺した後にもう一人を殺す。

この巨腕は巨大なこともあり、動きは単調だと思うかもしれないが、それは間違いだ。

腕に巻き付くこのカグネの指で器用に絡めとることもできるし、腕はどのような方向にも曲げることができる

これまで、自らに立ちはだかった何人もの喰種や捜査官をこの腕で葬ってきた。

その巨腕2本を用いれば、どのような捜査官とて瞬殺は可能。

そう判断し、正面から向かってくる捜査官に対して、自らも突撃し必殺の攻撃を行おうと、若い男の捜査官から一瞬目を離した瞬間、その若い男のいる方角から乾いた気の抜けた音が聞こえた。

音が聞こえたと同時にその音源に対して左腕を盾にするようにして向ける。奇妙な形をしたものはどうやら飛び道具だったようだ。しかし、体に衝撃がくる様子はない。

外したか？

そう疑問に思ったと同時に左後ろから何かが自らを通り越していくのが見えた。

その瞬間に疑問は確信へと変わり目の前の敵に集中できることを悟る。まぬけめ。内心で攻撃を外した捜査官を馬鹿にする。

そして正面の相手に対して必殺のパターンである片腕で横に大きく腕を凪ぎ払った後に、恐らく先程同様に攻撃をかわすだろう敵に対して回避中を狙った2撃目にて仕留める。単純ではあるが、この両手を用いた攻撃で多くの白鳩を仕留めてきた。

グールは自信をもって攻撃に移ろうとした瞬間、通りすぎていった筈の小さなおもちゃのロケットを想像させるような物体は急に角度を変え自らの正面を横切り更に自らを中心として円状に回りだした。なんだ？その不思議な軌道に疑問を抱いたその瞬間にロケットの形をした物が通りすぎていった跡に何か月明かりにより反射したものが見えた。

グールがそれに気付いた瞬間、それが極めて細いワイヤーかなにかだと気づく。

そしてワイヤーのたるみがなくなったことで一気に自らに巻き付き、拘束してきた。

だが、グールは心の中で嘲笑う。高々このような細いワイヤーごときでは一瞬でも拘束すること等不可能だと。そして体に巻き付くワイヤーを引きちぎろうとした瞬間。バチッ！とワイヤーと体の接触部から今まで聞いたことがない激しい音が聞こえた。

直後体が硬直し、更に体に力が入らず、走り出していた体は一気に地面に衝突した。転倒した直後グールは何が起きたか分からずほんの一瞬だが呆けてしまう。しかし幾度となく白鳩達と死闘を繰り広げてきた経験により培われてきた本能が動かないと死ぬ。殺される。と頭の中で絶叫するように本能が警鐘を鳴らす。

グールは本能に従い直ぐ様体を動かそうとするも体は痺れて思うように動いてくれない。
そしてなんとか四つん這いになりながら頭を上げ正面を視界にいれる。しかしそこにはすぐ目の前に迫った不気味な笑顔をした男が右手に持つレイピアで自らの頭を貫こうとする姿が視界一杯に広がっていた。
恐らく、並みのグールであれば体をまともに動かすこともできず、ましてやその動きに反応することもできず、何がおきたかわからぬまま、頭を串刺しにされて終わっていただろう。
だが、巨腕という2つ名で捜査官たちから恐れられ、多くの戦いで勝利してきた巨腕のグールは痺れて動かない体を全力で動かしレイピアの切っ先からなんとか頭を反らすことに成功する。しかし切っ先は頭を貫きはしなかったが、グールの左肩を勢いよく深く貫いた。
貫いたレイピアは直ぐ様、引き抜かれ引き抜かれると同時に血を勢いよく吹き出し、引き抜いた捜査官は舌打ちと共にグールの右側を走り抜けていった。
グールは痛みと体全体から襲ってくる倦怠感によりまともに思考することが不可能になっていた。
ただ本能のまま怒りに身を任せ、後ろ姿を見せて己から距離を置こうとしている男の無防備な背中に自らのカグネをぶち当ててやろうと膝立ちになりながら上体を半回転させ、まだ動く右腕を勢いよく振りぬこうとした時、視界の端にもう一人の男が目前まで迫っているのが見えた。その男がもつ薙刀の刀身は先程までなんらへんてつもないものであった筈が、今では真っ赤に染まり不吉な輝きをして今まさに己へと振り落とそうとしていた。
防御も回避も間に合わない。

グールの視界は走馬灯が流れるように、ゆっくりと振り落とされていく薙刀をまるで他人ごとかのように眺めていた。真っ赤に染まった刀身は自らの右肩に触れるとなんの抵抗も感じぬように滑らかに斜めに胴体を切り裂いていき左脇腹よりすんなりと抜けていった。

安室一等は、グールの体を袈裟に切り裂いた後、まだ足らぬとばかりに振り抜いた薙刀を勢いがのったまま体を一捻りし、柄の反対側の刀身で今まさに倒れふそうとしているグールの首目掛けておもいっきり振り抜いた。

二度斬り裂かれたグールの体はゆっくりと倒れていくと、袈裟斬りにされた胴体は２つに別れながら地に落ち、頭も胴体から別れるとそれぞれが同時に鈍い音を立てて、地に落ちていった。

部屋からは戦闘音が消え、夜の静寂が戻り、崩れ落ちたグールの体が地面に落ちて生じる鈍い音がやけに屋内に鳴り響いた。

グールの体を三分割にした下手人である安室一等は僅かの間グールが起き上がらないことを確認すると体の中の空気をゆっくり吐き出し深呼吸を一度してから構えを解いた。

そして、グールの姿を見て、自らの失態に気づく。

「やっべ、やり過ぎた！」

そんな気の抜けた声が屋内に響き、安室一等は嚇包に損傷がないか死体を検分し始める。

「何度も言っているだろう。頭を落として効率よく殺るか、苦痛と屈辱に染め上げるようにして四肢を切り落とすかのどちらかが最上だと。君はいつもやりすぎだよ。まぁ、それも悪くはないと思うがね。」

責めるような言葉を投げる真戸上等だが、言葉とは裏腹に顔には愉悦の籠った満面の笑顔をして安室一等のやり方を称賛するかのように語りかけた。

「そんなこと言わずに嚇包が無事か確認するの手伝って下さいよぉ。あーぐろい。」

そんな泣き言をいいながらグールの体をまさぐる安室一等。

「私はこれから本部に連絡を入れなくてはならなくてね。恐らくまた無断でグールの討伐に向かったことを責められるだろう。君が代わりに現状の説明と言い訳をしてくれるなら手伝っても構わんがどうするかね。」

その言葉に即答で、結構です。連絡よろしくお願いします。と苦笑いしながら返答する。

あーまた帰ったら怒られるのか。

そのようなことを想像し憂鬱になりながらも嚇包が無事なことを祈りつつ、グールの体をまさぐり続ける。背後からは携帯電話で本部に状況を飄々と説明する真戸上等の声を聞きながら、安室一等は手を止めずに動かし続けた。

その夜。巨腕のグール率いるグール集団は一晩のうちに捜査官二人の手によって壊滅した。

第1話　安室大地に立つ

なにか不思議な夢を見た。

アムロさんみたいにニュータイプとなって俺つえーしたいと。そんな願望をよくわからない存在に語っていたと思う。

いい加減、中二病は卒業したい。俺は夢を思い出しながら自分に呆れつつ寝起きの意識を覚醒させていく。はて、俺はいつのまに寝ていたのだろうかと思いつつゆっくりと体を起こす。そして周りを見渡すとそこは見慣れたぼろアパートの自室ではなく、そこは全く身に覚えがない部屋だった。更には小学校に入学したかどうかの子供がところ狭しと自分と同じように布団で雑魚寝している姿を見て昔野球部の頃合宿で使用した大部屋を想像してしまった。

その光景に動揺しつつ、昨日酔っ払って誰かの世話にでもなったのかと過去のことを思い出すが会社から直帰して明日も仕事であるからすぐにベットで就寝した記憶しかない。

まさか、拉致でもされたかと、内心焦りだし体を動かそうとした時、ふと自らの体は、こんなにも小さかったかと疑問に思う。見える体の部位はまるで、周りで寝ている子供達と同じように小さく、幼さが垣間見柄る。

そんなまさか。

動揺する自分を必死に抑え、常夜灯により僅かばかり照らされた薄暗い部屋を見渡すと部屋の片隅に水道の蛇口と小さな鏡が見え、慣れない体をゆっくり動かし、周りにいる子供達を踏まないように近づいていく。

そうして、鏡まで近づき、意を決して鏡を覗く。

えっ？

思わず声が出た。

そこには、今まで見慣れた３０になろうとする自らの顔ではなく、赤茶けた髪をした幼い顔つきの１０代前半の小さい顔が呆けた表情をして、突っ立っていた。

自らが、この別世界に転生を果たしてからすでに１０年近くが経とうとしていた。
転生した当時はしばらく動揺し、周囲から変に見られることもわずかばかりあったが、周りはそれもしょうがないと納得もしていた。それは何故かというと、自分がいた施設というものが、喰種により被害を受け天涯孤独となった身寄りなき子供達が集められた施設だったからだ。周りには自分以上に時折取り乱し、錯乱する子供やら、目にハイライトをなくした目をした子供ばかりがいたことで、自分が特別、注視されることがなかったからだ。
そして、今でたキーワード。喰種というのに皆さんは疑問を持つだろう。なんだそれはと。
当初、俺も疑問に思った。
転生した頃は前世とそう変わらない世界。僅かばかり時代が違うかな程度だと思っていたが自らの境遇を認識していくうちに明らかな相違点があることに気がついたのだ。
この世界には、前世には物語の中にしかいなかったような化け物が身近に潜んでいる。
その名が喰種である。
外見は人とそう変わらず、基本的に人間社会に溶け込み人と同じように暮らしているのだ。
これだけ聞けば無害に聞こえるようだが、それは大いに間違っている。
奴等は人しか食べれないのだ。人間が牛や鳥を平気で食べるように奴等は人間を平気で食べる。まともに教育を受けていないグールが多い為、反社会的な奴らばかりで、倫理観も全く持ち合わせていない。
さらに喰種は人より運動能力が優れ、人の数倍の筋力をもち拳銃程

度では傷をつけることができない硬度を持つ皮膚を持っている。これだけでも相当やっかいなのだが奴等は極めつけに赫子と呼ばれる捕食器官を持っておりこの存在が喰種を更に数倍厄介にしているのだ。

その他に赫子を体に発現させる時や興奮時に目を赤くする嚇眼も喰種の大きな特徴でもある。

明らかに人間より種として優れ人を襲う化け物が身近に潜んでいることに最初は恐怖したが、人間もただ手をこまねいている訳ではなく喰種対策局（ＣＣＧ）という公的機関を設立し喰種に対抗しているとのことだ。そこに所属するものは喰種捜査官と呼ばれ喰種を元にして作成されるクインケと呼ばれる武器を用いて危険な喰種を日々駆逐しているらしい。

ここまで詳しい喰種に関する情報を俺はかなり早いうちに知ることができた。それは何故かというと今いる施設がＣＣＧの施設であることが原因であった。

なんでも、自身の家族は喰種被害に会い、唯一生き残った子供が俺らしく、自分はＣＣＧの施設に預けられた訳なのだ。

その施設は善意だけではなく、自分と同じような喰種被害を受けた身寄り無い子供を引き取り、将来の喰種捜査官を育てようとする側面も持っていた。施設側から無理に捜査官へなるよう無理強いはしてはこないものの、喰種に被害を受けた子供達のほとんどが復讐心から、喰種捜査官になることを望むらしい。

そして、俺自身も喰種捜査官になることを望んだ。

別に復讐心からではない。残念ながらこの世界の家族のことは思い出すことが出来なかったから、そこまで感情移入することが出来なかった為だ。だが、いくらかの正義心が働き、喰種被害から人を守りたいと思ったのは、理由の１つだろう。

しかし、何より心が動かされたのはやはり前世にはいなかった化け物をクインケという武器で倒すというまるで映画や物語染みた職業だからだろう。

おまけに公的機関である訳だから、公務員であり、福利厚生は充実しており、危険手当ても多くつくのでなかなかに高給とりだ。
しかし大変危険であり、殉職率は全職業Ｎｏ．１に輝くほど。だが俺はその点は比較的楽観視していた。
なぜなら、俺には前世にはなかったいわゆる第６感と呼ばれるシックスセンス的な能力、そして前世よりも異様に高い運動能力を持っていたからだ。やはり、転生する前にアムロさんみたいなニュータイプな能力を持って俺つえーしたい。というアホな願いを誰かが叶えてくれたのかもしれない。まぁ本当ならＭＳに乗って。という但し書きが付くのだが、不完全なりにも叶えて頂いたことにより、人よりいくらかのアドバンテージ。そして戦闘にも役立ちそうだと思い、俺は捜査官になることを決断した訳だ。
喰種捜査官になると決断した後は流れるようにして、時が過ぎていった。
捜査官になることを推奨していることもあり、ＣＣＧのジュニアスクールへ入学を果たし、前世で受験戦士（二浪）だったことあって、座学はそこそこの成績を残した。実技面ではトップの成績を1年目で叩き出して、2年目も頑張るぞと気合をいれていた時にお偉いさんから、君すごいね。飛び級してみない？来年あたりから飛び級制度作ろうかなと思って君を試験的に対象にしたいんだけどどう？
なんてお話があり、評価して頂いたからにはやらせていただきます。と即答して、スクールをすっ飛ばしてＣＣＧに正式採用となったわけだ。
ちなみに座学も前世あればもう少しがんばれよと思うかもしれんが、在籍中にクインケ操術や実技面にどっぷりはまりこんでしまった弊害だろう。
前世とは比べ物にならない身体能力により自分の体が思うとおり動いてくれることに快感を覚えてしまい鍛錬にはまりこんでしまったのだ。鍛えれば鍛える程目に見える程の成長をしていく我が身に日々追うごとに魅入ってしまい僅かに自らに恐怖を覚えたが、戸惑う時間すら惜しいとばかりにひたすら鍛錬な日々を過ごした。更には

学生同士の実戦形式試合では相手が次にどう動くかがまるで、手に取るようにして分かることから学生同士の試合では無敗を誇っていた為、余計にそんな自分に酔いしれてしまっていた。そんな訳で暇があれば、体作りやクインケ操術の技術を磨き、スクールの教員や時々やってくる現役捜査官からうざがられつつも、しつこく技術を教えてもらっていた。まぁ、その時に上には上がいるということを現役捜査官の一部の方に思い知らされたわけだが。

そんな日々を過ごしているとあっという間に時間は過ぎていき、ジュニアスクールを卒業となった。

そして、俺は一般のスクールを出ていないことから三等捜査官（スクール出は二等から）として正式にＣＣＧの捜査官に採用され、有馬貴将特等捜査官を上司として、通称零番隊へと配属され、第２４区地下探査　通称もぐらたたきの任務に就くことになったのだった。

日の当たらない、薄暗い地下の中２つの集団が命を懸けて争っていた。一つは全員が同じ白い上着に中には頑丈そうなボディスーツを着込みそれぞれが手に武器を持つ統率のとれた集団。そしてそれに対峙しているのが、服装はまばらで各々が背中の一部から普通の人間にはない器官、いわゆるカグネを生やした喰種の集団だった。

白い服装の集団を襲うのは喰種であり、白い服装の者達は明かにただの人間にしかみえない。普通であれば喰種に襲われたなら、人間は一溜りもないだろう。だが状況は白い服装の集団が圧倒していた。

そう、白い服装の者達は人間でありながら喰種の天敵であり、グールから白鳩と恐れられている喰種捜査官達であったからだ。

「安室前に出すぎだ！」

背後から、自らの指導役をしてくれている宇井先輩の怒声が聞こえてくる。俺が有馬班に配属されてから、何かと面倒を見てくれ、公私

共に自分に対して今みたいに激しい怒声を飛ばして面倒を見てくれる素晴らしい先輩である。実力も入局して1年たらずで多くの功績を上げ、一等捜査官になる等、有馬班のホープとして周りには期待されているすごい人なのだ。おかっぱ頭に細身でまるで女性と見間違う顔をしているくせに、その実力は侮れない。

初対面時に女性と勘違いして、殴られたのはいい思い出だ。安室なのにな。俺はジェ○ドじゃないぞ。

過去のことを思いだしつつ、側面から飛んでくる羽赫のカグネを視界に入れることなく、射線から体を反らし、目の前の今まさに飛び掛かってくる喰種の一撃も更にかわして手に持つクインケで攻撃を放ってきた隙だらけの喰種の頭を片手の一振りで切断する。目の前の障害を片付けたことで更に前進し、別の捜査官に負傷させられ、必死に逃げようとしている喰種を見つけたので、その喰種も同様に一撃で斬り殺した。

近くにいる喰種を一掃し、周囲から殺気を感じないことから一度立ち止まる。クインケについている血を振り落としながら周囲を見渡すと先程俺を狙ってきた羽赫の喰種は宇井先輩に丁度両断されており、更に見渡すと有馬特等がこの喰種集団の親玉であろう喰種を穴だらけにして、止めを刺しているところであった。その周囲には零番隊の一員や平子さんが丁度戦闘を終わらせたようで、周囲を警戒していた。

敵のいくらかはどうやら逃走したようだが、喰種の死体が２０近く散乱していることから極僅かだろう。

こちらの被害は死傷者はいないもののいくらか傷をおった者もおり、近くの者が手を貸している。

「一時休憩に入る。手の空いてる者は負傷者の後送準備」

有馬特等が指示をだす。

皆がそれぞれ、事前に決められた通り休憩する者と周囲を警戒する者で別れていく。

余裕のある者は負傷者達の元に集まり、傷の具合を確認していた。

俺も休憩組ではあったが、そこまでの疲労を感じなかった為、負傷

者達の治療を手伝おうと、歩きだそうとした時後ろから声がかかる。
「待て。お前はまず説教からだ」
そう言ってきたのは、戦闘中に怒声を飛ばしてきた宇井先輩だ。
冷静な顔をしているが、これはマジで切れる5秒前というやつだ。経験からわかる。
「どうして！指示された動きをしないんだ！いつも言ってるだろ！前に出過ぎるなって！これだからスクールをでていない脳筋はいやなんだ！」
そう怒鳴りながら首元を掴んでくる宇井先輩。
俺は宇井先輩が納得してくれそうな言い訳をすぐ様展開する。
「いや、羽赫もちがフリーになっていたのでやむを得ず俺が前に出ざるをえなかったんですよ。俺が前にでれば、囮として注意を引き付けれると思いまして」
事前に考えていた言い訳でなだめるように、言い訳に聞こえないように言い訳をしてしまった。
「そんな言い訳が通じるわけないだろっ！僕たち全員がそんなのわかってたさ！あの場面では君は私と歩調を合わせて、陣形を維持しつつ対処するのが堅実だったろ！」
火に油を注ぐというのは、正にこの事を言うのだろうなぁと内心思いながら、正論で返されたことにより、俺は何も言えなくなる。
「どうせ、敵主力にちょっかい掛けようとして前に突っ込んだんだろ？ほら、本当のこと言えよ。」
これ以上の言い訳は許さないと言わんばかりの視線を向けられ、俺は手を挙げ降参の合図をして、ぶっちゃける。
「だって、割と大したことなかったし、あの場で俺が前に出ても迷惑掛からなかったじゃないですか。なら、有馬さん達の援護にいければなぁと。ははは」
宇井先輩の体が怒りで震え、あまりの怒りで逆に冷静になったのか。下を向きながら、やっぱり後輩の教育なんて無理だ。等とぶつぶつ呟いている。以外にこの先輩は精神的に弱い部分があるので時々こうなるのだ。

俺は、すかさず、フォローを入れる。
「先輩自信持ってくださいよ。俺は先輩が教育係でよかったと思ってますよ。それと俺が悪いのは明白なので自分を責めないでください」
「だったら私の言うことを聞けよ！それとお前が悪いのはわかってるよ！」
どうやら、自分の言葉で更にヒートアップしたらしく、説教が再開される。これは長くなるなぁと思いながら、自分が悪いので、黙って聞くことにした。
だが、あえて更に言い訳をさせて貰おう。
俺は喰種との戦闘が好きで前に出ている訳じゃない。戦闘狂とかじゃあないんだ。
じゃあ、何で危険犯してまで、さらに前にでるのかって？そんなの簡単だ。
クインケほしいんだよ！強くてかっこいいの！
今、俺がどんなクインケを使っているかというと、斧である。戦闘用であるからトマホークか。
名前もトマホーク（1／3）という安直な名前だ。尾嚇のクインケで扱いやすいだろうということで有馬班に配属させられた時に渡された支給品である。性能面も極平凡でありレートはB、別にギミックなんて物は一切ない。叩き斬るのみ。刀身がヒートしたりなんかしません。
見た目？ザクが持ってるあれだよ。
そんな訳で非常に不満があるのだ。安室零という名前を今生でもらっておきながら、何故このような、名前と相反する武装をせにゃならんのだ。せめて、刀剣類よこせよ。俺は連邦派なんだよ（まじぎれ）
とまぁ、自らの武器に不満たらたらなのだ。
じゃあ、強力でかっこいい、自分の名前に準じたクインケが欲しいとなったら方法は2つだ。クインケの材料となる喰種を自分で狩る。もしくは実績を積み上げて強力なクインケを配備してもらうかだ。
後者は当然時間がかかる。それはダメだ。我慢できない。
最近このトマホークに愛着が湧いてきてしまい、これにスパイク付

きのシールドがあれば・・・
なんて考えてしまう始末だ。明らかにまずい傾向である。なので精神衛生的に時間を掛けていられないので、やはり前者の選択となるのだ。
そして、喰種を倒した者が基本的にそのクインケの材料となる嚇包の所有権を得るわけで、新人の俺は基本後方よりに配置されているので、クインケにしがいのある喰種は有馬さんか他の隊員にさっさと駆られてしまう訳だ。俺が相手にするのは大体が赫子も出せないような奴か小さい赫子を振り回す程度の良くてBレート程度ばかり。
これでは多少無理して前に出てしまうのは、しょうがないだろ。
そんな不満をぶちまけたら、間違いなく拳骨が飛び、説教が延長されるので、私今の配置不満です。と延々と説教を垂れている宇井先輩に眼で訴えて見る。
そうしていると、伝わったのか分からないが、軽く睨まれた後、溜め息を吐いて掴まれていた胸ぐらを離してくれる。
「前で戦いたいんだろ?本当はもう少し後ろで学んでいて欲しがったんだけど、有馬さんの許可があればお前が前衛をこなしても構わないと私は思うけど、有馬さんの許可次第かな」
溜息をつきながら、もう好きにしろよみたいな感じで意外な返答が返ってきた。なんと宇井先輩からのお許しがでた。
だが、配属されてから半年近くが立とうとしているのだ。最近は無理やり前にでようとすることが多かったが初期の頃は得意の感知能力で、仲間と敵の動きを把握しそれなりにうまく連携していたのだ。討伐数もそこそこに多いし、そろそろ評価されてもおかしくはないだろう。
「じゃあ、有馬さんから許可貰ってきますね!」
と、善は急げとばかりに有馬さんに突撃を仕掛ける。その後ろから、あ、待てよっ!私も着いてくから!
と、任されれた私も行かないと教育係の顔が立たないだろと、何度目かの溜め息をまた吐き、うい先輩と有馬さんの元に向かった。

そう、遠くない場所で有馬さんを見つけた。どうやら平子さんからの報告を聞いておりこれからについての話し合いをしているようだ。傍で話しが終わるのを待とうと近づくと。二人は自分達に気がつき、此方に視線を向け話を止めて声をかけてくれた。
「宇井と安室か。どうした」
尋ねてきた有馬さんに単刀直入に前に出させてくれ。とお願いしようとすると、宇井先輩が手で制して自分が言おうとした言葉を丁寧に有馬さんに尋ねてくれた。
「いいんじゃないか」
有馬さんは少しも間を置くことなく了承の返事をくれた。
「動きは何度か見たが悪くない。後は実戦で磨けば更によくなると思う。丈はどう思う?」
傍にいる平子さんに有馬さんは尋ねる。
「大丈夫だと思います。周りをよく見てますし、技量も申し分ないです」
と相変わらずの無表情で返答した。
二人からばっちりと許可を頂き、そばにいる宇井先輩はなにか納得いかない顔をしながらも特に異論はないのか了承する。
「では、安室を前衛主力として対応します。」
「ああ。宇井も安室のサポートをしっかりな。」
有馬さんが宇井先輩に一言伝えると、宇井先輩は、はにかみながら任せて下さいと嬉しそうに答えた。
零番隊の皆さんみんな有馬さん大好きだなー
そんなことを、宇井先輩の笑顔を見て思った。
その後にいくらか有馬さん達と言葉を交わし、休憩後目標ポイントへ出発となった。

今回の任務は２４区の未踏破エリアのマッピング及び調査活動であり、目標地点に近づく事に危険度は増していく。あれから休憩後出発して暫くは襲撃はなかったものの目標ポイントに到達してからは喰種集団の襲撃が増え始めてきた。

俺含め、宇井先輩を班長とする班は有馬さんがいる班を中央集団とし、その右翼を固めるようにして配置されていた。左翼には平子さん率いる班が展開しており、１班が４人から５人とし２０人近い集団でなかなかの大所帯で警戒しているのだが、喰種達はそんな俺達を平気で襲ってくる。

「安室！Ｆ１３で対応！」

俺は宇井先輩の下、最前衛となって喰種に突っ込み、今しがたトマホークの一撃で喰種を地に沈め、更なる獲物を見つけようと立ち止まることなく前進していた。だが背後から宇井先輩の指示が飛ぶ。

「了解」

指示を聞いた俺は了承する。俺はその時、喰種の集団に全力疾走で突っ込もうとしており正面にいた喰種５、６匹がそれを見て応戦の構えをとるが、指示を聞いて、全力で前にだした右足を思いきり力をこめて、踏ん張り、前進から後退に瞬時に切り替え喰種から距離を置く。

その直後、背後にいた隊員が、バズーカ状のクインケを方膝をついて、撃ち放つ。放たれた巨大な弾頭は轟音を背後に置き去りにして対峙していた喰種集団の真ん中に直撃し大きな轟音を建てて爆発を起こした。

割と近くで起きた爆発により強烈な熱風で肌を僅かに焼かれるが立ち止まってもいれず、後退していた体を再度、敵に突撃させる。

この動きは足に非常に負担がかかるので、あまりしたくないんだけど。と内心思うが、口には出さず前進する。

そんなことを考えているとすぐに、宇井先輩が追いつき並走するようにして、右側に着くと、正面で痛みに悶えている喰種達に容赦なく止めを刺していく。抵抗はカグネをがむしゃらに振り回すだけで当然宇井先輩と俺にはかすりもせず、次々と始末していった。後は作業

みたいなものかと思い、周りを見ると、一番多くの数を相手していた有馬さん達中央もこちら同様に戦闘というよりも殲滅戦に移行しており、平子さん達も喰種を追い詰めていた。
短時間で連戦続きだった為、さすがに体に疲れを感じ、さっさと終わらそうと正面にいる必死に千切れたカグネと腕を再生しようとしもがいている喰種に止めを刺そうと近づくと、急にゾワリと体に電流を流されたかのような悪寒が走った。
「なにか来ます！」
いたるところから殺気を感じ俺は大声を上げて周りに周知する。
しかし遅かった。俺が声を上げると同時に壁、天井、床が突如震えだした。

あらゆる方向の壁や天井の一部として機能していたＲｃ細胞壁が割れるようにして開かれ、いくつかの場所では、床や天井の細胞壁が膨張し、まるで壁になるようにして、有馬さんや平子さん達の班と分断するようにして壁が立ち塞がった。

分断されたーーー

そう思うと同時にいたるところのＲｃ細胞壁の裂け目から殺気を感じる。
無数の喰種が裂け目から這い出ると同時にこちらを襲い始めたのだ。
あらゆる方向から殺気を感じる。
直感と自らの反応スピードにより赫子による攻撃を体をそらすことで回避し、難しいと判断した攻撃はトマホークで弾く。傍にいた宇井先輩もなんとか無事に凌いでいるようで、回避しつつ後方にいたバズーカ状のクインケを持つ生島さんに宇井先輩が指示を出す。
「生島！壁を破壊しろ！東は生島の援護！私と安室で二人の周囲をまびくぞ」
俺達の援護に回っていた生島さんとその傍にいた東さんも俺達側

に分断されたらしく、有馬さん達との間にできた壁を破壊するように宇井先輩が指示をだした。

指示に対して了解の返事をした生島さんは分断された壁にそのバズーカの砲口を壁に向け、先程と同じ射撃態勢で構えて引き金を引こうとした時、生島さん達の頭上になにかでかいプレッシャーを感じ、俺は生島さん達に大声で叫ぶ。

「上だ！避けろ！」

しかし、俺の声に反応はしたが体を動かすことは間に合わなかった。

壁を吹き飛ばそうとしていた生島さんの頭上から突如、鎌状の巨大な赫子が落ちてきた。振り子の様にして上から放たれた鎌状の赫子はその軌道にいた生島さんの胸部を切り裂きその勢いを減じることなく、その脇にいた東さんの頭も刈り取っていった。二人の顔は驚愕に満ちた顔をして、ばたばたと体を分割され地に倒れ伏す。

「なっーーー」

驚愕の表情で宇井先輩はその光景を見ていた。

そして、いつの間にか出来ていた天井部の穴から、覗かしていた鎌状の赫子とその本体である下手人が地上に飛び降りて来る。

そいつの体格は小柄でやせぎすな体をし薄茶色のローブを体に纏い顔にはゴーグルと顔の下半分を覆うバラクラバにより素顔は全く分からない。

そして、その細い体に反比例するように腰から突き出した2本の赫子は異様に巨大だった。太さは成人男性の腰回り程であり、異様に筋肉質。更に特徴的なのが先端が鎌の様に緩い弧を描いており、その内側には鋭利な黒い刃が見えた。

遠巻きに他のグールと交戦しながら観察していると奴はこちらを見て、不気味な笑い声で笑い出し俺と目が合うと、狂ったかのように更に大声で笑い始める。

ーーー狂ってる。
そいつからはまともな思考を全く読み取れない。わかるのはただ従順に本能に従っていることだけだ。
突如現れたグールが今までのよりやばい奴だと認識し、そいつを視界に常にいれるように周りにいる雑魚を
処理していく。
しかし、視界の片隅で捉えていたそいつは急に笑うことをやめて、地面に両手をつけ、四つん這いの姿になる。
なにかくる。
直感で悟り、警戒を強めていると、急に巨大なカグネを背後に思いきりしならせ、勢いをつけてから宇井先輩と俺に向け、まるで草を刈るかのように薙ぎ払ってきた。
ーーー!
宇井先輩と俺はこの状況でそんな大振りをしてきたことに驚愕した。
俺達は別の喰種と交戦中であり、当然近くに味方である筈の喰種がいる。それにも関わらず、味方を巻き込みかねない攻撃を平然と振るってきたのだ。
「めちゃくちゃだなっ!」
宇井先輩と俺を襲った1本づつの鎌状のカグネはお互いに驚きつつも、姿勢を低くすることで回避に成功し、替わりに近くにいた喰種をまとめて二分割にした。
どうやら仲間意識が全くなかったらしい。味方を皆殺しにしたというのに、奴は、後悔どころか、奇声のような笑い声で笑い続けている。
そして狙いを俺につけたのか、喰種が俺を見てからクラウチングスタートのような構えをとり、足の筋肉を倍以上に膨張させてからまるで足元を爆発させたかのように俺に飛び掛かってきた。
「うっそだろーーー」
そのスピードは今まで戦ってきたどの喰種よりも速かった。来ることが分かってにも関わらず、今までのグールより少し速い程度だ

ろ。と甘い考えでいた為、完全に油断し回避が遅れてしまう。
最悪の失態だ。と自分を罵り、回避を諦めてやむを得ず敵の攻撃が来るだろうポイントに盾替わりにトマホークを置く。その異常なスピードを纏った喰種の殴りがトマホークに直撃する。
あ、やばい。
直撃した瞬間、クインケから悲鳴のような音が聞こえ、咄嗟に受けきれないと判断し、衝撃をいくらか殺す意味で後ろに跳んだ。
抵抗を諦め、直撃と同時に背後に飛んだ瞬間、ドンッと鈍い音が聞こえ、すぐに衝撃が体に伝い、その勢いで体が後ろに撥ね飛ばされる。
浮遊感を感じながら背後から宇井先輩の声が聞こえた気がした。
一瞬の浮遊感の後、勢いよく体が地面と何度も衝突し、地面に体をぶつける度に警告音を鳴らすかのように体が痛みを訴えかけてくる。
痛い‼ちくしょう！と心の中で毒づく。
今まで能力のお陰で任務中被弾したことがなかったことが災いしてしまい、痛みによる混乱で受け身を失敗し無様に地面を転がり続けてしまう。
ヤバイ。追撃きたら終わる。
地面を転がりながら、態勢を立て直そうと必死になる。
機敏に察知できるはずの殺気が焦りによりうまく感じることができない。敵が今どうしているかがまるで分らず、それが更に余裕をなくした。ただ、がむしゃらに転がり運動エネルギーを殺し続ける。
そしてようやく、勢いを殺しきり体が静止した頃にまともな思考ができるようになる。そこで疑問に思う。
追撃の好機だったろうに。なぜ？
やっと態勢を持ち直して吹き飛ばされた方向を確認する。
顔を上げ、下手人の状況を確認することで疑問が氷解した。
視界を向けると、宇井先輩がクインケ　タルヒのギミックを使用し、刃を瞬間的に伸ばしてくれたことで追撃の赫子を弾き飛ばす光景を目撃することができた。
宇井先輩は刃を直ぐ様、元の形状に戻し、お返しとばかりに伸ばしてくる鎌状の赫子による攻撃もすらりとかわし、2撃、3撃をクイン

ケで捌いているが、赫子のスピードそして重さが明らかに今までのグールと段違いであり、徐々に圧されつつある状況であった。
俺は倒れ伏しながら自らの体に異常がないか確認する。
体中痛いがどれも軽症だ。ボディアーマを着ているとはいえ、自分の体の頑丈さに感謝するばかりである。前世であれば体中の骨を骨折していただろう。まぁこの世界の人間（捜査官）は人辞めてるような連中が多いので、この程度ですむ捜査官は多そうだが。
そんなことは置いておいて、先程の失態の借りをかえさねば。
十分にかわせる攻撃を慢心で被弾した上にパニックに陥る等、本家様に申し訳がたたない。本家様ならまず余裕で避けていたし、回避した上で同時に反撃までしていただろう。
俺は汚名返上すべく、宇井先輩の支援に動こうとした。どうやら喰種は俺を戦闘不能にしたと思っているのか俺のことを気にもしないで、宇井先輩に攻撃をし続けていた。
その光景を眺めつつ立ち上がろうとしたとき一瞬だが戦闘中の宇井先輩と目が合い、お互いの意思がなんとなく伝わった気がした。お互いの意図が通じたのか、宇井先輩は喰種が俺に対して背を見せるように仕向けつつ、それに気づかれないように器用に立ち回る。
すぐにでも助けに行きたいが、宇井先輩がそう簡単にやられるということも想像ができないので、宇井先輩を信じつつ、俺は倒れ伏したまま好機を待った。
そして、俺に遠からず、近からずの絶妙な位置で俺に背を向け、２本のカグネを伸ばし切った瞬間に俺は先程見せつけらた喰種のダッシュに負けじといわんばかりに、倒れ伏した姿勢から真似するようにクラウチングスタートの姿勢に切り替えて、おもいっきりスタートを切った。
陸上選手も顔負けではないかというスピードで一気に近づき、さっきのお返しに倍返しだと言わんばかりの一撃を与えるため、トマホークを両手持ちにして走りながら構えた。
喰種は直前に目敏く俺の接近に気がついたようだが遅い。
喰種は宇井先輩に伸ばしていたカグネを防御に回そうと動かすが

俺は更に加速して喰種の目の前まで接近した。喰種は先程まで宇井先輩に夢中だったこともあり迎撃しようにも宇井先輩へ赫子を伸ばし、上半身を前のめりにしていた為、まともな態勢で迎撃することは困難だった。なんとか上半身だけをこちらに向け俺に苦し紛れに虫を払うかのように手を横に振るってくる。

苦し紛れの一撃なんて当たるか馬鹿め。と心の中で罵り、喰種の脇をすり抜けながら、両手に持ったトマホークで腹部を深々と切り裂き、走り抜けた。

その一撃に手応えを感じながらグールから距離をとり、そのまま同じく、喰種から距離を置く為に下がっていた宇井先輩と合流する。

「怪我ない!?心配させんなよ!」

喰種を警戒しつつ、こちらをチラ見して先程攻撃を受けたことについて心配してくる。

「お陰でなんとか、5体満足で無事ですよ」

本当にさっきのフォロー助かりました。と感謝の念を込めて伝える。

「貸しひとつね。それよりもまだ終わってないよ」

貸しにされるのは全然構わないのだがと思いつつ、言葉を聞きながら目の前の光景を見て愕然とする。

立ち上がれる筈がない傷を与えたというのに、グールはゆらりと立ち上がり、こちらを睨んでいた。

腹部に与えた一撃は背骨すら断ち切った感触もある会心の一撃だった上、引き抜く際ひねりを入れて臓器にダメージを与える嫌がらせまでしたというのに、どういう訳か奴は苦痛に悶えながらも傷を時が巻き戻るかのように回復させてこちらを睨み付けていた。

「鱗嚇の喰種とはいえ、驚異的な治癒力だね。レートはSとして対応するよ。とりあえず安直だけど大鎌の喰種ってとこかな。私達で仕留めるよ。いいね?」

宇井先輩がタルヒを構え喰種を睨み付けながらSレートと仮認定する。そして二人だけであの喰種を抑えると伝えてくる。

「もちろん。いい加減新しいクインケが欲しかったんですよ」

俺はぼろぼろになった自らのクインケを見ながら了承する。
先程から防御に攻撃にと酷使した結果刃には細かく刃こぼれを起こし、柄は僅かながら防御した際に歪んでしまっている。おそらくあと1回かよくて2回全力で振れるかどうかだろう。
やはり高レート相手にはいささか火力、耐久面で不満がある。
それなりに愛着があるもののやっぱり新しいクインケが欲しい。なによりも安室さんには似合いません！
「俺、前に出るんで、あれの所有権もらっていいですか？」
そう言うと呆れたように、しかし苦笑いしながら宇井先輩が言う。
「威勢がいいのは、いいけど無茶するなよ。一人だときつそうだから」
そう言って、俺達は喰種に対してクインケを向け、憎々し気に睨む喰種へと対峙した。

二人の若手捜査官が大鎌の喰種に対峙する。
一人は槍の形をしたクインケもう一人は斧のクインケを持つ。喰種はそれを見て表面上では腹の傷を完全に修復させたように見えるが、傷があまりにも深かった為どうやら修復は不完全らしく、喰種は苦痛の声を漏らしながら、言葉とは言えない咆哮を挙げ二人を威嚇した。
その様子からまともな思考を持っているのか非常に疑問で、獣を想像させられる。姿は正に手負いの獣といえる様相であった。
熟練の捜査官でも臆するであろう咆哮に対していくらも臆せず捜査官2人は喰種に向かって突撃する。喰種はその姿を見て赫子を弓を絞るようにしてぎりぎりと不快音を奏でながら背後に引き絞る。そうして近づいてくる二人に引き絞った赫子を力を開放するように必殺を期した刺突を繰り出した。
言葉となっていない絶叫を上げながら放ったその一撃は、並みの捜

査官であればまさしく必殺であっただろう。来ることが分かっていたとしても弾丸と同じようなスピードで放たれた1撃をかわすことはそう簡単なことではない。威力も直撃すれば二人の捜査官は容易く真っ二つになる。しかし当たらなければどうということはないのだ。

その攻撃に狙われた二人の捜査官ではなかった。

一人は優秀な者が多く集められる有馬班の中で更にその中でも優秀と言われ、周りからは有馬班のホープとして期待される者であり、もう一人は新人でありながらＣＣＧでも随一の反応速度と卓越したクインケ操術を持ち、ＣＣＧのジュニアスクールでは他を隔絶した実力を発揮して異例の飛び級を果たした異端者である。

そのような二人には、すでに狙いが丸見えな時点で、攻撃が当たる可能性は皆無であった。

宇井捜査官は上体を半身にし大きく上半身を後ろに引くことでかわし、安室は攻撃がくる直前にまるでどこに攻撃が来るか分かっていたかのように僅かばかり体をずらすことで、掠るかどうかの最小の動作でかわしてみせた。

その光景に喰種は僅かに驚愕するも、渾身の一撃を易々とかわした二人に更なる怒りがこみ上げ、伸びきった赫子に力を籠めると赫子は蛇のようにうねり出し、そのうねりで二人を鞭で打ち付けるかのように攻撃をする。しかし初撃と違い威力も速さもない攻撃で手数に頼るだけの攻撃では到底二人の捜査官に打ち付けることはできなかった。

二人は手に持つクインケでいなし、そして避けるなどして、二人は突撃を止めることすらなかった。

必要最低限の動きでかわした安室は全くスピードを衰えること無く喰種へと突き進む。宇井捜査官がいくらか避ける際に速度を落としたことにより安室が前に躍り出て喰種との距離をさらに縮める。

安室に遅れをとった宇井捜査官が安室の背後で何かを呟くと、喰種との距離が残り僅かという所で、遅れて横に並走していた宇井捜査官は喰種の視界から完全に隠れるように、安室の背後にぴったりとつ

く。
　そして、ついに先頭にいる安室の一振りが喰種に届くであろう距離にせまったことで喰種は赫子では迎撃が間に合わないと判断し今だ完全に回復しない腹を押さえながらも迎撃の態勢をとる。それに応じるかのように先頭の安室による一撃が振るわれた。
　放った一撃はスピード、重さも一流のそれであったが、喰種の優れた視覚をもってなんとかその一撃を反応し、後ろに一歩下がり上半身を背後に反らすことで喰種は回避する。さらにその回避姿勢から後ろにバク転を行いながら追撃してくる安室の顎に向けてムーンサルトを行うように器用にも蹴りを放つが、安室は首を傾げるだけで回避し後ろに下がる喰種を速度を全く落とすことなく追撃した。
　すぐに喰種に追いついた安室は先程、攻撃を外したことに焦ったのか、攻撃方法を両手での大振りに切り替え、大きく横凪に振るう。しかし流石の喰種も何度も見れば攻撃の速度にもなれ、危なげなくその一撃を避ける。
　そしてカウンターとばかりに攻撃を外して隙をみせている安室に一撃を放とうとしたその時、喰種の視界に安室の肩のやや上から、しなる刃が喰種目掛けて襲いかかるのが見えた。
　その予想外の一撃に喰種は直ぐ様、回避しようとするが間に合わず、左肩に刃は深く突き刺さる。
　実は安室の大振りの一撃は囮であり、真の攻撃は安室の背後にいることで喰種からは見えないように放たれた宇井捜査官が放つ一撃であった。その一撃に喰種は苦痛の声を上げ、痛みにより動きが鈍る。
　しかしその鈍りは喰種を更に苦境に落とした。
　かわしてくることを予測していた安室は宇井捜査官が放った1撃が喰種に突き刺さるのを確認してから更にもう一撃を放っていた。
　喰種は苦痛の声をあげながら、生存本能によりとっさに前に出した手で安室の一撃を掴み掛かろうとする。しかしその一撃は喰種の手のひらの中指と薬指の真ん中に刃は綺麗に入り込みその一撃は肘まで切り裂いていった。
　安室は再度致命を与える為、もう一撃与ようとした所で背後から首

もとにひりつく殺気を感じて、横に転がるようにしてその気配から回避する。
殺気の正体は伸ばしきっていた赫子であった。その赫子を勢いよく戻したことで背後からの奇襲としたようだがカグネの存在を忘れるわけがなく宇井捜査官と安室はグールを深追いせずに回避に専念する。
すでに喰種は度重なる負傷で、動きを緩慢とさせており、接近戦に懲りたのか捜査官二人を近づけさせまいと残る気力で赫子を振り回した。
喰種の体は既に右肩に穴があき左腕は手のひらから肘までを縦に切り裂かれ既に両手は使い物になるように見えなかった。
再生も追い付いておらず最初の一撃でかなり消耗していたのか出血をなんとか塞ぐのがやっとのように見え、まさに満身創痍の状態である。

「鱗嚇とはいえさすがにタフだな次でしとめるぞ」
「了解」
短く言葉をかわすと二人は先程と同じく宇井が戦術パターンを安室につぶやき再度突撃する。
喰種は接近してくる捜査官に高速で赫子を振るうが全くあたる気配がなく喰種はその異様さに怖じけずく。このままでは殺される。
ここに至り、ようやく喰種は逃走を決断した。
しかしその判断はあまりに遅すぎた。
捜査官の安室の動きは既に赫子の動きに完全に対応しており、周りからみればぎりぎりでかわしていることから危なっかしくみえるがその実回避による無駄を限りなくなくすためであった。現に安室の突撃に減速はなく、回避行動をとっているにも関わらず、更に加速しているようにも見える。
安室に全く追いつくことができない宇井も背後からその動きを見て、こいつ何者だよ。と呆れていたりもしていた。
そうして喰種は再三に渡り接近を許してしまい、ついに安室のトマ

ホークが首へと振られた。
既に多くの深手を負っていた喰種はそれを回避することもできず、その一撃を拒むように悲鳴を上げるばかりで、先程の抵抗が嘘かのように、容易く刃は喰種の首を斬り裂き首が地面に落ちていく。そして更に駄目押しといわんばかりに宇井捜査官の槍が心臓を貫く。
二人は瞬時に距離をおき喰種の様子を観察する。しばらく喰種の赫子は周りをのたうち回り体は酷い痙攣を起こしていたが、いくらもたたずに動きを完全に停止した。
「やりましたかね」
「やったな」
二人は完全に動きを止めた喰種を見て安堵し周囲を見回す。その直後轟音と共に壁が破壊され、有馬さんが顔をだす。
「無事か?」
有馬さんは相変わらずの無傷だ。壁の向こうを見るとそこには無数の喰種が散らばっている。しかしそこには
こちらの人間の死体も混ざっており、こちらと同様激戦だったのを窺えた。
「こちらは2名が殉職。生き残りは私と安室3等のみになります。」
宇井先輩が生嶋さんと東さんの無残な姿を見てそう報告する。
「そうか。こちらも被害がでた。丈の班もほとんど同じ状態だ。すでに損耗率が4割を超えた為、これより撤退を開始する。準備してくれ」
有馬さんは撤退を決めたようだ。俺は宇井先輩の指示のもと撤退の準備に取り掛かる。
俺は殉職した捜査官達に一瞬の黙祷を捧げ、敵を討ったことを報告し、思考を切り替えた。
「さてさて、赫包は無事かな?」
俺は、大鎌の喰種に近づきながら赫包の無事を祈った。初のSレートである。
立派なクインケになるに違いないと、喰種の体の傍で手をわきわき

とさせ、にんまりと笑顔をむける。
そして背後から、さっさとしろよ。と若干引いた感じで宇井先輩から催促が飛んできたことから、慌てて赫包の取り出しを開始した。
その後、無事に赫包の回収を完了し、宇井先輩と有馬さん達と合流してその場を後にした。
こうして、配属されてから、何回目かの２４区地下探査任務を無事完了させたのである。

第2話　地上勤務命令

地下探索任務を終えて、しばらく立ち、有馬さんから昇進の話があった。

「昇進の推薦しといたから。試験がんばって」

以上の一言を休み明けに出勤早々に言われた。

あ、試験は免除じゃないんですね・・・

俺はそこそこ一般教養に関しては自信がある。だが昇進試験は喰種についてや喰種対策法等とても専門制が強い。そして俺はスクールを出ていない&ジュニアスクール時代は実技一辺倒だったので、知識は極僅かしかないのだ。試験まで後1ヶ月少々。果たして受かるのか？

有馬さんから推薦してもらったにも関わらず、落ちたらどうなるのだろう。俺は背筋になにか冷ややかなものを感じ、頼れる先輩の元に向かった。

「落ちたら承知しないよ？」

頼れる先輩宇井えもんに泣きついたら、冷たい言葉を投げ掛けられた。

あぁ。やっぱそういう反応してくるのか。恐らく零番隊の連中はみんなこんな反応に違いない。

「俺別にずっと三等でもいいし」

ちょっと強気になって別に落ちても俺は気にしないということを言うと。宇井先輩がお決まりの溜息をついた後、宇井先輩のガチな視線で睨まれた後に冷たい視線を俺に向ける。

「お前がスクールを出ていないのは知ってるし、脳筋だってのも知ってるだが、有馬さんの推薦を無下にするのは許さないよ。」

泣き言は許さないし絶対受かれ。そう言外に言ってくる。

俺は、ですよねー。とあまり見ない宇井先輩のガチな視線を受け、冷や汗を流して答えた。

「わかりました。俺頑張ります・・・」
落ち込んだ風に了承して、俺はその場を去ろうとする
しかし、予想してた通りに宇井先輩から声がかかった。
「ま、まてよ。別に何も手伝わないとは言ってないだろ。お前の指導役を有馬さんに任されてるし、落ちたりなんかしたら、私の指導にも問題があるように見られかねない。しょうがないから手伝うよ」
少し、照れながらぶっきらぼうに協力すると伝えてくる宇井先輩。
まじちょろい。
「今、なんか言った？」
どうやら、言葉に出ていたらしく、俺は慌てて、頼れる先輩だなって言いました！と適当に誤魔化す。
「本当かよ」
じと目で睨まれつつ、いつもの溜め息をしながら先輩は、俺に勉強を教えてくれるのだった。

「安室三等捜査官、君を二等捜査官に任命する。」
宇井先輩が鬼教官と化して勉強を教えてもらってから1か月。試験を無事合格し、本日ＣＣＧ本局の大広間に多くの
捜査官が集まり、昇進式が行われていた。俺以外にも多くの捜査官が壇上に呼ばれ、局長から新たな職位をもらっている。俺みたいな三等から二等に上がるような平まで、こうやって式典に呼ばれて局長自らが、任命してくれるとは、公務員ってすげえなぁと実感する。
その後、俺と宇井先輩はＳレート討伐が評価され白単翼賞を貰ったりして、最後に局長から挨拶が終わって無事閉幕となった。そして、ようやくお楽しみの式後の立食パーティーである。まぁただの食事会みたいなものなのだが。
周りは、どうやら人脈作りやらで必死に色々な人に話しかけているようだが俺は別に上昇志向など持ち合わせていないので、ただ飯に集

中だぜ！と必死に肉やら寿司やらを自分の取り皿に分けて食事に専念する。
　ちなみに、俺はジュニアスクールしか出ていないため、顔みしりの同期というものがいない。しかも基本地下探査で長期任務ばかりだったのでＣＣＧで知っている顔というのは零番隊の方々だけなのだ。
　要するに、この場でほとんど俺みたいなペーペーの顔を知っている奴はいない訳でわざわざ話しかけてくるような奴はいない。要するに食事に集中できるってこと！別に寂しくないんだから・・・

　俺はちょっと寂がりながら、やけ食いをしていると、どうやら挨拶周りを終えた宇井先輩がこちらに近づいてきて話しかけてくれた。
「お前、食事ばかりしてないで少しは顔をだしてこいよ。」
　呆れたような声で俺に話しかけてくれた宇井先輩はいつも通りお小言から始まった。
「いいんですよ。俺みたいな新人誰も相手しませんよ。それにあまり昇進とか興味ないですし？」
　別に上昇志向というものがないわけではないのだが、最終的に一等捜査官になれればいいやくらいなのだ。
　なので、そんな面倒な挨拶をわざわざする必要性を感じない。しかも、たかだか二等になったばかりの１年目の若造である。どうせたいして相手にもされない。だったら飯くってたほうが有意義なのだ。
「いや、お前は中々注目されてるんだぞ？そもそも飛び級なんて庭出身者以外聞かないし、１年目からＳレートを討伐して白翼単賞なんて異例なんだからな？」
　お前はもう少し自分の立場に自覚をうんたらかんたらと、宇井先輩のありがたい説教が始まりだしてしまったので、俺は聞いているふりをしながら、せっせと食事を口に運ぶ。
　宇井先輩の話に適当に耳を傾けながら食事をしていると、俺に近づいてくる二人組のおっさんが見えた。
　その二人をよく見ると、どちらも見覚えがある顔だった。

「久しぶり安室。中々活躍してるらしいじゃない。」
「うむ」
　話かけてきたのは、ごつい外見に似合わず軽い調子で話かけてくれたのが篠原教官で、口数が少なく、だいたいの返事をうむで済ませてしまうのが黒磐特等である。ちなみにどちらもジュニア時代調子に乗っていた俺に上には上がいるということを教えてくれた人達であり、人外な方たちである。ゴリラの血でも入ってんじゃないかな。
「お久しぶりです。篠原教官。黒磐特等。本局で会うのは初めてじゃないですか？」
　篠原教官は教官というだけあって基本的にはスクールに籠っており、黒磐特等も担当区域の支部に籠っているのであまり見かけない。顔を合わせたのはジュニア時代にクインケ操術の指導をして貰って以来だろうか。
「そうかもね。ちょいと本局に呼ばれたから、ついでに教え子達の顔を見ようと思って式に出席させてもらったんだよ。そしたら安室の顔が見えたから、ちょいとお祝いの言葉と思ってね」
　どうやら、ついでではあるが、数回指導してもらっただけだというのに、わざわざ声をかけてくれたらしい。
　ちょっとうれしい。
「ジュニアスクールでは、初の飛び級対象者だからね。正直心配してたんだけど。1年目からかなり活躍してるらしいじゃないか、あまり無茶はいかんよ？しっかり周りの言うこと聞いてる？」
　心配するように俺に語り掛けてくれる篠原教官。こういう気遣いはうれしいよね。さすが教官だ。人心掌握には長けてるぜ。しかし、宇井先輩がいる状況で後半の質問をされると答えずらいので、今はしてほしくなかった！
「あ、あたり前じゃないですか。零番隊の皆様の指示に従い、常に任務を全うしております！」
　ちらっと、宇井先輩に目配せしながら、目で話あわせてと念を送りながら答えるが、宇井先輩の目が細くなり、不気味な笑顔をした。これはあかん。

「へー指示に常に従ってる？中々に面白いことを言うね。」
その一言を皮切りに、今までの任務中の俺の活躍をノンフィクションで語りだした。俺が命令無視をする場面を強調しながら。
「なかなか、楽しいことをしているな？」
その話をきいた篠原教官は口調は変わらずだが、修正が飛んできそうなオーラを醸し出してきたので、必死に話題転換に励む。
「っそれより！教官はなんで本局に呼ばれたんですか？もしかして現場復帰ですか？」
あからさまな話題転換であったが、どうやら俺の言葉に溜息をつきながら応じてくれた。
「うーんあまり、詳しくは言えないんだけど、もしかしたらそういう話もいずれあるかもって感じかな？まぁ今すぐってわけでもないよ」
どうやら、一応現場復帰についての話だったようだ。話題を振ったからにはと、その後は、適当に話題を振ったり、振られたりと話しをしていると、篠原教官と黒磐特等は、そろそろお暇するということで、帰ろうとした時、
有馬さんと知らない捜査官が俺達に近づいてくるのがみえた。はて、有馬さんからは俺と宇井先輩はすでに式前に祝いの言葉を貰ったし、目の前にいるおっさん二人に用かな？と近づいてくる二人をみながら考える。
他の三人も有馬さん達に気が付き、篠原教官が話しかけた。
「おー、有馬に真戸か。久しぶりだな」
篠原教官は有馬さんの隣にいる捜査官も知っているようで、近づく二人の名前を呼んで、手招きをする。
「お久しぶりです。篠原さん。お元気そうでなによりです。」
「篠原か。久しぶりだな。教官職がどうやら板についてるようで安心したぞ。」
有馬さんと真戸と呼ばれた捜査官が篠原さんに気軽に言葉を返す。どうやらそれなりの関係らしい。
俺はこっそり、近くにいた宇井先輩に隣にいる真戸って誰？と聞く

と、それなりに有名な人だよ？と一言言ってから教えてくれた。
「真戸上等捜査官。篠原教官や法寺捜査官とペアを組み多くの功績を残してきたベテラン捜査官だよ。
実力と実績だけを鑑みれば上等以上の職に就いててもおかしくないんだけど、本人に上昇志向が無いのと問題行動で今だ上等らしい。」
どうやら、事情があるにしろ上等捜査官の中でもかなり優秀な人らしい。しかし不気味な顔をしているだけに、やはりなにかしら問題を抱えているのか。
俺と宇井先輩が小言で隅で話していると有馬さんが俺に話しかけてきた。
「安室に用があって来たんだけど、今いいか？」
俺に用か。てっきりおっさん二人のどちらかと思ったんだが意外だ。はてなんの用だろうか。
「俺にですか？」
なにかやらかした覚えもないが、やはり食事ばかりしてたことがよくなかったか？
しかし、有馬さんは別に怒ってる素振りもないし、怒っている姿をみたこともないので、そんなことは気にもしないと思うが、さて。
俺がなんだと身構えていると、有馬さんは別にたいしたことではないように、話始める。
「安室は、地上での喰種捜査の経験がないだろ？だから来月から真戸上等捜査官とペアを組んでもらうことになったから。」
ん？俺異動？この見た目怖い人とペア組んじゃうの？
俺がいきなりの爆弾発言に固まっていると真戸上等が挨拶してくる。
「やぁ。君が安室君か。噂は聞いているよ。ジュニアスクール初の飛び級制度の対象者であり、有馬班では新人でありながら多くの喰種を駆逐したとか。君みたいな優秀な若者を導けるか私には自信がないが、君の力になれるように努力させてもらうよ。」
謙遜しながら、俺を持ち上げつつ挨拶をしてきてくれた。顔に似合わずいい人そう？俺もよろしくお願いします。

と頭を下げて挨拶をする。
「ほー真戸と組ませるとは、中々いいんじゃないか。真戸は捜査は当然ながら、クインケ操術も上手い上、クインケにも詳しい。色々勉強させてもらえよ」
篠原教官が真戸さんに太鼓判をおし、黒磐特等もうむと同様に頷く。
「安室が地上捜査か。地下よりは危険は少ないほうだけど、捜査は難しいからあまり真戸上等に迷惑をかけるなよ?」
宇井先輩もいい経験になるしよかったじゃないか。と俺にアドバイスしてくる。

「あぁ。それと宇井。宇井には来月から俺の傍で働いてもらうから。丈が異動するかもしれないんだ。その代わりを頼む。」
その一言に宇井先輩が固まる。丈さんの代わりとか責任重大だなぁと他人事のように思いつつ自身もこれから大変だと思い、お互いがんばりましょう。と声を掛けておく。
「それでは、皆さん私はこれで失礼します。」
言いたいことを全て言ったのか有馬さんは、言うだけ言うとその場から去っていった。真戸さんもそれに続いて去ってしまい、元から去ろうとしていたおっさん二人組も頑張れよーと言ってから帰ってしまった。
後に残されたのは、今だ有馬さんからの一言で固まっている宇井先輩と俺だけである。
とりあえず、取り皿に乗っけておいた料理を口にしながら、宇井先輩に声をかける。
「とりあえず、今日飲み行きます?」
「・・・そうだな。」
顔を引きつらせながら、ぎこちない笑顔でなんとか答える宇井先輩は今だ上の空であった。

「やぁ。式以来だね。安室くん今日からよろしく。」
式から1月が立ち、俺は本局付けで真戸さんの元に正式に配属された。
式の時と同様、不気味な顔をしているが雰囲気はとても柔らかく、対応もとても余裕のある大人と言えるものだった。この1か月周りからの評判を聞いてみたが、クインケ狂いの真戸と呼ばれていたり、喰種に容赦がなく、少々独断専行のきらいがあるらしいが、それを除けば、いい人らしい。
というか、俺も地下任務の際の行動を鑑みると人の事をとやかく言える立場ではなく、クインケには俺も大変興味があるので、割と話しがあうんじゃないかと思ってたりする。今日の対応も正に大人の対応であり、人間的にもとてもいい人なんじゃないか？
「あれから、挨拶に伺えなくてすいません。異動前に地下任務と引き継ぎやら、捜査に関する勉強漬けで。」
「あぁ。聞いてるよ。宇井君から私も色々面倒を見てくれと言われてね。今日まで宇井君に大分しぼられていたようだね。」
捜査に関する知識等を詰め込まされていたのだ。先輩に。
しかし、宇井先輩からも面倒をみてくれと。事前に話してくれていたようで。事前に色々話を聞いているらしい。笑いながら周りに愛されてるねーと囃し立てて来る。真戸上等。
いい先輩だわー。
「では、そろそろ仕事の話をしようか。今は大きな案件を持っているわけではないが、捜査に関して地下とはだいぶ違うし、スクールを出ていないのなら、まずは実際足を使いながら教えていくとしよう」
そう、言いながら車を既に回していると伝えられ、俺は真戸さんに連れられ、東京の様々な場所に連れていかれた。
「今日はこのくらいにしておこうか。」
1日中東京を駆け巡りながら、どのような場所を喰種が餌場にして

いるか、またその習性等を丁寧に解説しながら、実地で教えてくれたのは、とても分かりやすかった。餌場としている可能性がある場所にいくつか赴いたが、その際になんとなく、怨念というか、嫌な雰囲気を感じ、嫌な雰囲気がしますね。と伝えるとそういう雰囲気を感じ取ることや、直感に従うことは非常に大事だと伝えられ、私もそれなりに勘が冴えているほうではあるが、君もそれがわかるようなら、その直感を大事にしたまえと伝えられる。あなたはニュータイプですかね？と聞きたくなったが、そういう人ってやっぱいるのか。と前世とはやはり違う世界なのだと実感する。

「ところで、今日はこれで業務は終わりとするが、この後親睦を深める為にも飲みでもどうだね？」

おー。こうやってお誘いを頂けるのは大変うれしい。むしろ俺から誘いたかったくらいである。しかし残念ながら用事があるのだ。

「すいません。凄くうれしいお誘いなんですけど、今日の夕方知行博士に呼ばれていまして、新しいクインケを取りに行かないといけないんです」

でも明日以降ならいつでも大丈夫です！と心苦しいが、今日は用事があると伝えると、目つきがとても鋭くなり、なにか興奮したかのように聞いてくる。

「それはもしかすると君が最近討伐したというＳレートの赫包を使ったクインケかね。」

よく、ご存じで。それですよ！宇井先輩から所有権を正式に昇進祝いがわりに頂き、ついに昨日完成したと、連絡があったので、俺もどのようなクインケができたか非常に楽しみなのだ。

「もし、邪魔でなければ私もついて行っていいかね。クインケには私は目が無くてね。Ｓレートはここ最近拝めていなくて、是非とも見せてほしいのだが」

嫌でもついていくぞ。と強い眼光を感じ、拒否する理由もないので、快諾する。じゃあ、クインケの回収が終わったらそのまま飲み行きましょう。と伝え一緒に、地行博士が待つＣＣＧの研究所へと向かうことになった。

「君が安室くん？話では聞いていたけど随分若いね。私は知行という。今回君のクインケの作成を担当させてもらったよ。それと真戸さんもお久しぶりです。」
おかっぱ頭で目元を髪で隠した白衣の男性が研究所に到着するなり、声をかけてきた。どうやら真戸さんとは知り合いのようだ。
俺は挨拶を返し、真戸さんも久しぶりだねと挨拶をする。
俺は早く、クインケを見たかったので本題のクインケについて、聞く。
「中々に良質な赫包だったから、僕も気合を入れて作成させてもらったよ。形状等に関して特に希望はないと宇井君から伝えられたから、赫包に一番最適な形状を取らせることで強力なクインケに仕上げられたよ」
え、希望だせたの？だったらビームソードが良かったんだが。まぁ一番最適な形状にしたと言うので、無理に形状を希望するのも逆に性能を下げる原因になってたかもだし。それでいいか。安室さんはＭＳでもＭＡでも扱えるんだぜ？でも、ガンダム系列の武器がいいです！と内心願いつつ、クインケが置かれている部屋に案内される。
案内された部屋は倉庫がわりにもなっているのか、とても広い大部屋であった。そこには一つのケースが置かれており、これが君のクインケだと手で差し示し、展開してご覧と知行博士が伝えてきた。
俺はその独特の冷たい雰囲気をまとうケースにゆっくり近づき、手に持ってから、ケース状に格納されているクインケを武器へと形状を変化させた。
一瞬でケースの形態から武器状にと変形する。その姿は２ｍ程度の薙刀であり、短い柄の両端には柄よりも数倍長い刃が取り付けられている。薙刀のほとんどが刃で占めているという一見、非常に扱いずらそうな構造であった。また、短い柄にはいくつかのスイッチが取り付けられていた。
「形状は薙刀を主体にし、両端に刃を取り付けさせてもらったよ。形

状はやや、変則的な形となってしまったけど、宇井君は君なら十分に扱えると言ってたから、心配してないのだけど、どうかな？他にもいくつかギミックを備えさせたんだけど・・・」
隣で、知行博士が解説してくれているが、俺の耳にまともにその声が入ってこない。
両端に長い刃があり、手に持つ柄部分が刃に対して短いことから扱いが慣れるまで大変かもしれないが、手に持つとクインケは思ったほど重くなく、扱いに習熟すれば、片手でも扱えそうな取り回しのしやすさ。そして見るからに切れ味が鋭そうな刃。手に持つと、異様にしっくりくる感じ。軽く一振りしてみるが、まるで俺のことを待っていたかのような相性の良さであった。正直、ここまで、自分にしっくり来るとは思わなかった。これだけのものを作ってくれたことに不満はない。
そう。不満はないのだ。だがあえて一言いいたい。もう一度言うが不満ではないのだ。凄く私情なことでくだらないのだが、あえて言うならばだ。
これ、ゲルググのあれだろ!?　なぁ俺安室なんだけど？トマホークに続いてまたジオン系かよ！
俺は連邦派だって何度言え（ｒｙ
俺は胸中で声にならない悲鳴というか、絶叫みたいなのを声にださないように必死にこらえながら、抑え込みつつ突っ込むのを我慢する。知行博士はジオニストなの？

そして、俺がクインケを一振りし、若干震えているのを満足し感動しているように捉えたのか。博士も笑顔で解説を続けてくれる。
「どうやら、満足してくれたようで安心したよ。実はこのクインケには２つ程ギミックをつけさせてもらっていてね。柄に二つボタンがあるだろ？まずは手前のを押してもらっていいかい？」
俺は冷静になりつつ、指示通り手前のボタンを押すと柄の中心で、薙刀は二つに分離し２本の曲刀として扱えるようになった。
「どうだい。薙刀を二つに分離することにより二本の双剣としても扱

えるんだ。狭い屋内戦闘なんかで活躍できると思うんだ。勿論、ギミックによって強度なんかは落ちてないから安心して」
あー既視感があるんじゃぁ。と心の中であほみたいな声をだして、二本の剣を片手に一本ずつ持ってから二本の剣を交互にぐるぐる回してあの使い方を真似する。

「おーもう使いこなしているのか。さすが期待の新人だ！」
眼腐ってるんですかねぇ。ただぐるぐる回しているだけですよ？
「じゃぁ。もう一つのギミックを説明するよ。この薙刀の刃は通常でもグールを余裕で切り裂けるだけの切れ味があるんだけど、その切れ味を更に増す機能をつけてあるんだ。
最近、研究が終わったばかりの機能なんだけど、名付けてヒート機能！短時間ではあるが瞬時に刃を高温にし、喰種のカグネを容易に焼き切ることができるんだ。まぁ本当に短時間だし、まだまだ開発したばかりだから、１度使うとしばらくこの機能は使えないんだけどね」
再現度たけぇな！これネオ（ｒｙ
じゃなく、本当にゲルググのあれだよなぁ。
その機能を作動させてから、まんまビーム薙刀な姿を見て諦観な念を抱き、茫然とその姿をみていた。
「どうだい。最近作成したクインケの中では自信作なんだけど。気に入ってくれた？」
形状に突っ込みたい気持ちが非常にあるものの、ええ。気に入りましたよ。妙にしっくりくるし、これが尻にしっくりくるというものなのだろうか。
冷静に考えてみれば、そう。ガンダムに乗る前の前座だと思えば納得はまぁ一応する。アムロさんもディジェに乗ってたし？
ようするに、Ｓレート以上の喰種を狩り続ければ、いずれ連邦制、ガンダム系の武器にも巡り合えるだろうと、プラス思考で考えつつ、安室がジオン製とか胸熱！と無駄にテンションを上げて、気に入りました。ありがとうございます。と応じる。
「うん。なにか不具合が起こったらすぐに持ってきてね。これからも

君には期待しているから、また何か大物を狩れたら任せといて。」
ジオン系はもうやめてね？と内心おもいながら、ぜひお願いします。と伝え、その場を去ろうと真戸さんに声をかけると、真戸さんが、なにか言いづらそうに声をかけて来る。
「安室君。素晴らしいクインケだね。よければでいいのだが、私にもクインケを少しみせてもらっていいだろうか？」
先ほどから黙って見ていた真戸さんが、やはりクインケに並々ならぬ興味があるのか。是非とも触らせてほしいと聞いてくる。
全然かまわんのだが。俺はかまいませんよ。と伝えクインケを渡すと、しばらく手にしながら振るったりしてから、やはりSレートはいいものだ。となにか聞き覚えがある発言をしつつしばらく、自分の世界に入ってしまったのを俺は知行博士と色々話しながら、眺めていた。

その後は、真戸さんと飲みに行くこととなり、娘がＣＣＧを目指していることを聞いたり、写真を見せてもらったり、可愛いなぁなんて呟くとそうだろう。嫁にはやらんぞ。等と親馬鹿な姿を見れたりして、親睦を深められたと思う。
この上司となら、なんとかやって行けそうだと安心し、新たなクインケも装備できたことで、いずれ、よりかっこいいクインケを入手するぞ。と意気込みながら、その日は二人で飲みあかしたのだった。

第3話　喰種の喰場を叩け！

真戸さんとペアを組み1年近くが経過し、季節は蒸し暑い夏へと変わっていた。
そんな、今年最高気温を叩き出し、真夏日となった都内で、俺は真戸さんと薄暗い路地裏を歩いていた。
別に、暑いから路地裏を歩いているわけではない。仕事である。
「安室くん見てみろ。ここしばらく我々が妨害したおかげで、このような真昼間から狩りをしようとする馬鹿な喰種がおるぞ。しかも飢えで禁断症状をおこしている。やはり知恵というものが無いな。」
「全くです。ちなみに俺がやっちゃっていいですか?え、ダメ?真戸さんがやるの?」
「偶には私に譲り給え。君にばかり戦闘を任せてばかりでは腕が錆びると言うものだ。」
俺達が路地裏でここ暫く、張り続けていたおかげでようやく、目的の喰種に遭遇できた。
キャップを深く被り、マスクをした男の前で緊張感が全くない会話をする。
「お、お前達まさかＣＣＧ!?」
付けられていたことに全く気が付いてなかったのか。帽子とマスクの隙間から見える目は黒く変化し、飢餓によって、喰種の特徴である赫眼を露わにしていた。
「中々に探し回ったよ。君みたいに警戒心が強いだけの喰種はやはり苦労に見合わんな。」
そう言うと真戸さんは最近、作成したというボーガン型のクインケを瞬時に展開し、狙いを本当に付けたのかと疑うくらいの早撃ちを見せつけた。
速い。俺じゃなきゃ見逃しちゃうね。
真戸さんの早撃ちで放たれた矢は反応出来なかった喰種の腹部に深々と突き刺さり、突き刺さると同時に矢の返しが喰種のＲＣ細胞に反応し、瞬時に内部から破裂するように膨張し、その勢いで喰種の上

半身と下半身が泣き別れになる。
「相変わらず、エゲツナイデスネ。それよりも羽赫のクインケ凄く羨ましいんですが。」
「ふむ、君もその新しいクインケに慣れてきたことだし、私がなにか見繕おうか？」
　そう言いながら、虫の息で必死に俺達から上半身だけで這って距離を取ろうとする喰種に笑顔で止めを刺す真戸さん。まぁいつもの光景すぎて、最近では真戸さんの光悦とした不気味な笑顔にも慣れた。特に思うことはない。だが、真戸さんが言ったことは、見逃せない。
「まじっすか!?後からやっぱりなしとか駄目ですよ！」
「あぁ。構わないとも。前から羽赫のクインケが欲しいと言っていたし、私もお気に入りが君のおかげで増えたことだ。丁度私以外に扱えるものがいなくて、埃を被っている羽赫のクインケがあるのだよ。それを君に渡そうと思っている。」
　おぉ！羽赫だって！もしかしてきちゃうか？例のあれきちゃう？しかし、扱いずらいと言う単語に嫌な予感が頭を過ったが、気にしないことにしよう。もう脅威のメカニズムは勘弁な。
「ここ最近君のおかげで捜査が捗った。この1年でこれだけの喰種を殲滅できたのは君の存在が大きい。少々早いが私からの昇進祝いだと思ってくれ。」
　俺達で駆逐した喰種はこの1年で相当数に昇る。しかし俺のお陰なのだろうか。捜査自体は真戸さんが大まかな流れを決めてただ俺はその補佐をしているだけなのだが。ただ、真戸さんの手柄を横取りしてるだけじゃね？
　しかも、ここ最近二人で駆逐した喰種は俺の功績となっており、おかげで真戸さんの推薦もあってか、一等捜査官になることが、内定しているという。なんか、申し訳なさすぎる。
「君は謙遜しすぎだよ。私は君に指示を出しているに過ぎない。それを確実に期待以上の結果を出す君に正当な評価を下したまでだ。気にすることはない。」
　たいしたことではないと真戸さんは言いきった後、支局へ連絡を

し、喰種の回収を依頼していた。

俺達が6区の支局に戻ると、支局長から本局に出頭要請がきていることを伝えられ、二人で本局に戻ることになった。今までは、人手が足りない区の要請を受けて、喰種を狩ることを繰り返していた。その過程で捜査について多くのことを教わり、真戸さんの指示にも最初はぎこちなかったが、今では大分答えれるようにもなった。しかし、ここ最近は地下との喰種とは比べ物にならない小物ばかりであり、Aレートの羽赫を1体駆逐したものの、それ以外はCレートの雑魚ばかりである。手に入ったばかりの薙刀では、オーバーキル以外のなにものではなく、一振りするだけで、回避もできない奴らばかりだったので、練習にもならかった。その点には酷く不満だが、捜査の基礎をこの1年で学べたのは大きいだろう。

「本局に呼ばれるってなんですかね？怒られることしましたっけ？」

全く、呼ばれることに対して、要件が思いつかず真戸さんに聞いてみる。

「安心したまえ。叱責されるような命令無視はここ最近なかったはずだ。もしかしたら別任務を申し渡されるかもしれんな」

任務といっても、ここ最近小物ばかりで少々物足りない。そろそろでかい山に関わりたいと少し不満に思っていると、どうやら顔に出ていたらしく真戸さんから声がかかる。

「おそらく、ここしばらくの任務は君に経験を積ませるのが目的だったのもあるだろう。

だが、さすがにそろそろそれなりの仕事を貰ってもいい頃合いだ。少しは期待してもいいかもしれんぞ」

真戸さんから、もしかしたらそれなりの任務がくるかもと、言われ俺は期待した。真戸さんのこう言った予想はよく当たるのだ。

「それは、楽しみですね。期待してます。あとクインケも」

俺はどちらも楽しみにしつつ、真戸さんと本局へと向かった。

俺達が本局に到着すると早々に局長から呼び出しがかかり、現在は局長から直々に任務が申し渡されていた。
「君たちには１２区で巨腕の喰種の捜査に当たってもらう。現在、１２区と１３区の喰種達の縄張り争いが激化している。１３区はジェイソンと呼ばれる喰種が率いる集団を黒磐特等が当たっているが、１２区の担当班が巨腕の喰種に壊滅させられてね。率いていた準特等も殉職した。その代わりに真戸上等がチームを率いて巨腕にあたってくれ。」
巨腕の喰種。レートはＳとして認知されており、ここ最近では１２区の喰種を率いて、１３区に殴り込んでいるらしい。準特等が捜査に当たっていたらしいが、捜査中に喰種に襲撃され殉職したとのこと。巨腕については甲赫だという以外情報がないが、戦闘能力が高く、好戦的。それなりに頭も回るそうで厄介らしい。なので、ここ最近殲滅率が高く、戦闘能力が高い真戸さんと俺のペアが選ばれたらしい。
「お任せを。期待に応えれるよう尽力しましょう。」
真戸さんがそう言ってさがろうとした時に、局長から待ったがかかる。
「そういえば、安室の昇進の件だが、認めよう。今日から安室くんは一等捜査官として捜査に当たり給え。」
おー。昇進だ。１年で昇進とか俺ってすごい？ていうか宇井先輩に並んだぜ。
まぁ宇井先輩は上等捜査官に内定しているので、すぐにまた職位はあちらが上になるのだが。
「二人には期待している。よろしく頼むよ。」
そう言われて、二人で頭を下げて退席する。ふう緊張したぜ。
しかし、とうとう１等である。わずか、２年と半年ばかりでなっちゃうってすごくない？
こんな若造をこんなスピードで昇進させて大丈夫なのだろうか。人手不足が半端ねぇな。ＣＣＧ。

「安室君。昇進おめでとう。君も今日から一等捜査官だ。その若さで大変だと思うが、もうしばらくは私も補佐はしよう。期待に応えられるよう励むことだ。」
そう固い言葉で、祝いの言葉を貰う。その言葉にお礼をしつつ、ちなみにクインケの件はどうですと聞くと、笑いながら、あいかわらずだなと言われ、着いて来るように言われた。
そして着いていった先には小さな作業台の上にクインケケースが置かれており、どうやら事前に取り寄せていてくれたようだ。
俺はどきどきしながら、真戸さんに展開していいですかと聞くと、構わない。と了解を貰えたのでクインケを手に持ち展開する。
クインケはケース状から武器へと変形すると、形状はけん玉といえばいいのか、持ち手はコーン状で、その上にロケット状のものが取り付けられている。
「通称ウミヘビ。軽量でコンパクト。ワイヤーが取り付けられたその先端の突起が射出されるようになっているのだ。更にいくらかの追尾機能を持っていてね。これに巻きつけた喰種に強力な電流を流すことができる。それに君は零番隊出身ならワイヤーを使用した戦闘は得意だと思いこのクインケを贈らせてもらったのが、どうだね？」
俺がクインケを持ち眺めていると、丁寧に真戸さんが解説してくれる。
これは、嫌な予感は外れたが、中々予想の斜めをぶっ飛んできたな。名前の通り、とあるエースが使用していたウミヘビとまんまだ。
薙刀といい、不満はないのだが、あと一歩足りないというか。アムロさんにこれはありなのか。すごい微妙な感じもするが、初めての羽赫のクインケである。大切に使わせてもらおう。
俺は気に入りました。うまく使えるよう頑張りますと伝えると。真戸さんは気に入ってくれたようなら私もうれしいと言われ、そこから、クインケについて喋りながら二人で１２区へと向かうこととなった。

「君達が真戸上等と安室一等だね。噂は聞いてる。ここ最近かなり活躍しているようで、来てくれて頼もしいよ。現状１２区でＳレート相手に戦闘可能な捜査官は先日全滅してしまった。」
俺と真戸さんは現在１２区の局長に着任の挨拶に来ていた。どうやら１２区に関しては先日の喰種の襲撃でかなり、人手不足だったらしい。
「更に増員を要請してはいるが、君達以上の増員はすぐには厳しいらしい。しかし１３区担当の黒磐特等は協力は惜しまないと言ってくれている。１２区の生き残りの支局員もうまく使って貰って構わない。なんとか巨腕を頼む。」
その後、別室に生き残りの捜査官を集めてあるのでそこで詳細を聞いてくれと言われたので、真戸さんが現場指揮等について幾らか話した後、俺達は捜査官達が集まる会議室に向かう為、その場を退いた。
「しかし、敵は集団なんですよね？別に二人で相手にするのは全然かまわないんですが、こういうのって、普通はもっと捜査官増員するんじゃないですかね？」
俺は会議室に向かう途中、疑問に思ったことを真戸さんに尋ねる。
「本来であれば、そうなのだが現在ＣＣＧも人手不足でね。各区で大食いやら美食家等ここ最近新顔のやっかいものが増えた。どこも上等捜査官以上という者は人手不足なのだ。まだ、１３区と協力してあたれるだけましだよ。」
そういうものか。やはり俺の昇進スピードは人手不足もあったらしい。
「それでは、まずは１２区の生き残りの捜査官と局員に挨拶をした後、黒巌特等といくらか情報を交換しよう。黒巌特等なら、いくらか情報をくれるだろう。」
そう言って俺達は１２区の生き残りの捜査官達が待つ、会議室にむかった。

会議室に着くと待っていた捜査官達が立ち上がりお待ちしていました。と言ってから挨拶をしてくる。
「二等捜査官の三原です。残念ながらクインケの戦闘が可能な捜査官は私のみであり、残りは支局員の者が何人か使えるのみです。後は殉職もしくは入院中でして。」
本当に人いねえな。
クインケ扱えるのが一人だけってどういうことだよ。と内心思うが、しかたないとあきらめる。そして真戸さんが現在の状況と今までの捜査の進捗について聞く。
「喰種の喰場としている場所はいくらか特定はできておりますが、拠点は判明しておりません。敵勢力はおよそ４０～５０程かと思われておりますが、正確な数はわかりません。
先日、喰種達が集まり、１３区に出向く情報を掴み、準特等以下のメンバーが出撃をしたのですが、巨腕との戦闘中に１３区の喰種もが戦闘に乱入してきまして、捜査官は軒並み皆殺しです。私は別の場所で監視についておりましたので、無事でしたが。資料についてはこちらにあるものが全てになります。」
どうやら、１２区の喰種の集会に殴り込みを掛けたらしいが、１３区の喰種がそのタイミングで乱入し、二勢力から袋叩きにされたらしい。可哀そう（小並感）
「ふむ。いくらか功を焦ったようだな。前任者は。１３区の黒磐特等と連携を取っていれば、１３区の動向もしれたのではないかね。」
真戸さんがそう聞くと三原と名乗った捜査官は言いずらそうにして言った。
「前任の準特等は、あまり他区と協力的ではなく、自分達だけで十分だと。黒巌特等と連携をとることを嫌がってるように見えましたので、恐らく・・・」
あー。そういうやつか。まさに功を焦ったという奴だ。そういう奴よくいるよね。ジオン最大の戦犯とか言われてるジ○ンとか。まぁ気持ちはわかるがそれは死亡フラグなので、俺も気を付けよう。俺は自分に自戒をしていると、どうやら真戸さんと捜査官で話は続い

ている。
「現状は把握した。君は私達の補佐をこれからして貰う。私と安室くんはこれから１３区の黒巌特等と情報交換をしてくる。君は局員達と喰場の情報について纏めてくれたまえ。
明日からでも張り込みを開始するのでな。」
了解しました。と言って得に不服はないのか、仕事を始める捜査官。そうして部屋から出ていくのを見届けた後、真戸さんが話始めた。
「安室くん。どうやら中々面白くなりそうだ。実質現場については私に指揮権があり、支局長以外にはとやかく言われることはない。そして先ほどの彼も決して現場が得意な人間ではないだろう。私達で喰種を独り占めにできるぞ。」
おー！周りからとやかく言ってくる奴もいない上に相手は少なくともＳレートそしてよりどりみどりなその配下の皆様。・・・たまらんな。
「いやーたまりませんね！」
興奮して言うと真戸さんも笑いを堪えながらも言う。
「だが、前任者と同じ末路を辿るのは勘弁だ。まずは１３区と情報を共有し、確実に屑共を殲滅しようか」
俺は了解と伝え、お互い立ち上がり黒巌特等が待つ１３区の支局へと向かった。

「黒巌特等協力感謝するよ。どうもそちらのジェイソンと巨腕は色々と関係があるようで情報をいくらかもらえればと思ってね。」
１３区の支局に待っていたのは、黒巌特等が率いる班員全員が揃っており、こちらを見定めるような目で睨んでくる連中が多いこと。やはり若造だとおもわれてるんだろうなぁ。
しかし真戸さんにもその目で睨むとは、ちょっとこっちをなめ過ぎじゃない？

俺も負けじと、睨みつける。
「安室君やめたまえ。これから協力する者達だ。仲良くとまで言わんが、険悪な雰囲気をわざわざ作るものではない。」
真戸さんのその言葉に俺は睨むのをやめると黒巌特等も「うむ」と周りを見回して一睨みするとあちらも引いてくれる。
「真戸上等、今回はこちらも手を焼いている。情報の共有は一向に構わないが、人員をそちらに回せるほど余裕はないが構わないか？本来なら１３区をまずはお前達と協力してから１２区に当たりたかったんだが、上は同時に進めることを希望して聞かなくてな。」
「なに、人は少ないがそれはそれで、やりようはある。１２区については任せたまえ。
それよりも１２区にも１３区のジェイソンの出入りが激しいと聞く。こちらの巨腕も１３区に同様に出入りが激しいと聞くが。」
黒巌特等が、あぁ。と言い一人の捜査官に目配せすると、その捜査官が説明を始める。
「現在、１２区の巨腕が率いる喰種と１３区のジェイソンは縄張り争いで頻繁に戦闘を行っております。つい最近も争ったようで、双方に被害がでた模様です。１２区の前任の準特等はその場で漁夫の利を得ようと、その場に殴り込んだようですが、双方から攻撃に合い。殉職されました。１３区のジェイソンはどうも頭が回るようで、こちらの捜査をかいくぐっております。また実力も高く被害も馬鹿にできません。また共食いを頻繁に行っている、という情報もあり、現状は奴らの棲み処を捜索中。捜索後、黒巌特等以下メンバーの最大戦力で、殲滅という方針をとっております。」
どうやら、捜査はしらみつぶしではなく、敵拠点を確認するまでは、控えめな捜査に徹しているようだ。
「巨腕に関してはなにか分かっているかね。」
「こちらでは、甲赫の喰種であること以外は。前任者があまり協力的ではなく、私共は１３区以外でのことは、ほとんどわかっておりません。」

前任者の準特等さんはやはり、あまり協力的ではなかったようだ。だから最初皆の対応がよくなかったのか。
その後も真戸さんが質問をいくつかしていく。
「了解した。13区の現状は把握したよ。我々は12区を中心に捜査をし、お互いにお目当ての喰種に関しての情報があれば、逐次共有していこう。」
真戸さんがそう言うと会議はお開きとなった。最後に黒巌特等から、ジェイソンはもしかしたら、赫者になりつつある。という忠告をもらい遭遇した場合は撤退するように忠告を受ける。真戸さんは笑いながらその忠告に感謝し、俺と真戸さんはその場を辞退する。
ちなみに真戸さんはその忠告に対して感謝はしたが了承はしてないんだよなぁ～
俺は歩きながら真戸さんに話しかける。
「真戸さん。これはチャンスじゃないですかね。巨腕に加えてジェイソンまで不可抗力で狩れるチャンスですよ。やばいですよ！」
俺は興奮しながら、真戸さんにチャンスだと告げる。Sレート2体とか贅沢すぎんだろうが。
13区みたいな消極的な捜査はしたくないと伝えると真戸さんは笑いながら答える。
「ふむ、確かに。うまくやれば愚図共を殲滅できんこともないが、我々の仕事はまず巨腕だ。ジェイソンはおまけにすぎんことを忘れてはならんぞ。まぁ偶然我々の前に出てこられたら、相応の対応をせねばならんがね。」
くくくといつもの不気味な笑いをこぼしつつ、まずは巨腕だと告げる。
「あちらは、それなりの数を誇る集団だ。こちらで喰種を正面から相手にできる者は我々だけ。ならばまずは、敵の手足を削りにいくとしよう。前任者はそれなりに優秀だったおかげで、情報はある。連中の手足を削ぎ取った後、お楽しみの頭を落とすとしようか」
真戸さんはとても楽しそうにこれからの事について語り、俺もどん

なカグネを持った喰種がいるか想像を膨らませつつ俺達は１２区へと戻って行った。

◆　◆　◆

薄暗い路地裏の中、スーツ姿の中年男性が猫背にして歩いていく。１２区は現在喰種の活動が活発であり、一人でこのような路地を歩くことは自殺行為となんらかわりない。それにも関わらず、軽い足取りで男は路地を歩き続ける。しばらく歩き続けると目の前に３人組のフードを深く被った若い男たちに遭遇する。一般人であればすぐさま回れ右して関わりになりたくない人種であることは姿からみて明らかなのだが、中年の男はまるで、３人に気が付いていないかのように、その男達に近づいていく。

「やぁ。夜更けにこのような薄暗い場所にいては危ないぞ？」

中年の男は全く、自分の状況がわかっていないのか、その３人に挨拶をするように気軽に話しかけた。

近づいてくる男に既に注意を払っていた３人は、急に話しかけてくる男ににやにやと笑いながら、返事をする。

「あぁ？そっちこそこんな夜更けに危ないぜ？ここらへんじゃ喰種が出るって話だ」

そう言うと３人の男が中年の男に近づいていく。そして真ん中に立つ男の背中が盛り上がり始める。

「ほら？こうやって腹すかした喰種の餌にされちまうんだ。次から気を付けるんだな？」

まぁ次はないか。と３人組は笑いながらそれぞれが赫子を展開して、一気に走り出し距離を詰めてきた。

「あぁ、忠告ありがとう。しかし私はこう見えて喰種捜査官でね。」

ほれ。と背中に隠すように背負っていたケースを見せつける中年の男性を見て、男たちの目つきが驚愕に変わる。

中年の喰種捜査官はケースを瞬時にクインケに展開させると、片手には刺突に特化したレイピアが姿を現しており、そのレイピアを構え、突出して前に出てきた真ん中の男にレイピアの間合いの外だというのに、刺突を繰り出した。

喰種はその行動を疑問に思いつつ、ただの餌かと思った人間がＣＣＧだということに内心緊張しつつ、早々に決着をつける為、背中のカグネを振るおうとした瞬間、レイピアの１ｍ程度の長さだった刃が凄まじい勢いで伸びだし、真ん中の男の左目を貫き、そのまま頭部を貫通していった。頭部を貫かれた喰種はそのまま倒れ伏し、その姿を見た両隣の二人は怖気づく。

頭部を貫いたレイピアの刃はすぐさま、刃が伸びた時と同様の速さで元の短さに戻り、捜査官は２撃、３撃と残りの男達に刺突を繰り出した。両隣にいた二人の男はその高速で振るわれるレイピアの刺突に反応出来ず、一人は胸部を貫かれ、もう一人は脇腹を貫かれる。

それにより、胸部を貫かれた男は苦しそうに悶えながら地面に倒れ伏し、脇腹を貫かれた男は既に顔を恐怖へと変え、傷を手で押さえながら逃走を図る。

「どこにいこうというのだね。そちらはもっと危険だぞ？」

男がそう言うと同時に喰種が逃げた先からパシュッと乾いた音が聞こえたかと思うとロケット状の飛来物が高速で飛んでくると喰種の周囲を旋回するように飛ぶ。そしてロケット状の飛来物の軌跡にはワイヤーの姿が見え、喰種を巻き取るようにして飛ぶと、たるみがなくなった瞬間、ワイヤーが一気に喰種をきつく締めあげた。そして締め上げると同時に、バチッと音がすると、喰種は一瞬悲鳴を上げると地面に倒れ伏し、いくらか痙攣した後、全く動かなくなった。

「やっぱり、飛び道具ってのはいいものですね。狙って引き金を引くだけで倒せちゃうんですから」

そう言って通路の奥からゆっくり歩いてきたのは、スーツ姿に片手にケースを持ち、もう片方には喰種を締め上げたワイヤーが繋がっているコーン状の形をしたクインケを持った若い男だった。

「確かに、羽赫のクインケは比較的低リスクで攻撃できるが、複数相手

には向かない物が多い。最後に頼れるのは格闘戦だ。それを念頭に置き給え。ちなみに安室君が相手にした喰種は生きてるのかね？私の方は1匹だけ虫の息だがなんとか捕獲したぞ。」

中年の捜査官がそう言うと、胸部を貫かれた喰種が生き苦しそうに呼吸をし、必死に傷を治そうともがいている姿を横目で見ると、身動きが取れないように右足の膝をレイピアで貫く。

肺を損傷しまともに呼吸ができていない所に更に追い打ちを掛けられた喰種は悲鳴を上げ、手足をばたつせる。最後の抵抗でカグネを振り回すが、レイピアでカグネすらも切断され、最後には気を失ってしまった。

「いや。今ので死んだんじゃないですか？白目向いて泡吐いてますよ。」

その光景を見た若い捜査官は軽く引きながら、自らの喰種に近づきながら告げる。

「まぁ、こちらは外傷なしでスマートに捕獲しました・・・よ？あれ？」

ワイヤーに囚われ倒れている喰種をみると、そこには息をしていない喰種が屍となり横たわっていた。

その姿を見て焦りだす若い捜査官は困ったようにもう一人の捜査官へ目を向ける。

「せいぜいBレートに届くかどうかの喰種ではそのクインケに耐えられまい。威力はある程度説明した筈だが、まぁ仕方あるまい。死んだ方が悪い。君は悪くないさ。それに1体いれば十分だ。」

若い男の失態に対して特に叱責することなく、自らが捕らえた喰種がいれば十分だと言うと、中年の男が息のある喰種を背負い、死体2体を若い男が首元を掴んで引きずるように運び始める。そして二人が去った後には大量の血痕だけが残り、寂れた路地には元の静寂が戻り始めた。

◆◆◆

ウミヘビが敵を倒すだと・・・・？
俺は驚愕していた。俺の経験からすると電撃武器というのは大体は相手に悲鳴（笑）を上げさせるが、結局は次のシーンで拘束を謎パワーで解き、ダメージなんてなかったようにピンピンしているのが定番である。しかしモブ程度の喰種には強力らしく、悲鳴を上げることもなく死亡してしまった。
あまり威力には期待していなかったのだが、存外ウミヘビは使えるようだ。いずれ部下を持つようになったらお揃いのウミヘビ３つを揃えて、敵をエクゾディアしたいものである。
俺が昨日の襲撃について反省し、どうでもいいことに脱線していると、聞きたくもない耳障りな悲鳴が耳に入ってくる。
「安室君、しっかり見ているかね。喰種共の尋問というのもいずれ君が行わなければならん時もあるかもしれん。口を割らすため効率良く苦痛を与える術は知っておくべきだ。」
血まみれの真戸さんはメスのようなナイフを持って俺にふり向いて告げて来る。今の真戸さんは間違いなくホラー映画で出て来るどんな存在より恐ろしい。俺はその姿を見て結構、ビビってたりする。
「いやぁ。あまりグロイの得意じゃないんです。戦闘は不可抗力として全然大丈夫なんですけど・・・」
そう言うと真戸さんは少し考えた後、確かにこういう事は本来ならば尋問官に依頼すれば済む話である。君は外で休んでいたまえ。そんな感じの事を言ってくれた真戸さんに感謝しつつ、お言葉に甘えてＣＣＧが保有する倉庫から外にでて懐から煙草を出し一服する。
ありゃ、尋問ではなく、拷問だと思うのだが突っ込むのは野暮だろう。
現在俺達は情報にあった喰場を張り込み、少数で活動している喰種を片っ端から捕獲ないし駆逐し敵戦力のまびき及び捕獲した喰種から拠点に関する情報を引き出そうとしていた。
しかし、かれこれ１０は駆逐し、３匹を捕獲したが一向に拠点の情報を持つ喰種に巡り合えない。だが今回の喰種は今までの雑魚とはちょっと違ってそれなりの赫子で抵抗してきたことから巨腕関係者

だと思っているのだが、果たしてどうだろう。
ちなみに、喰種対策法的では過度な尋問はアウトな！なので支局ではなくＣＣＧが保有している倉庫で真戸さんは尋問をしております。
そうやって一人現状について考えていると、暫くして真戸さんが倉庫から出てくるのが見えた。
「終わったよ。相変わらず拠点に関する情報は持っていなかったが一つ面白い情報を吐いたぞ。近々１２区のナンバー２とも言える喰種が部下を率いて１３区に赴くらしい。なんでも１３区に嫌がらせに行くようだ。
巨腕についての動向を知るチャンスだ。集合地点で敵を待ち伏せし、捕獲して敵拠点を暴くとしよう。」
ようやく進展する情報が取れたようだ。
「１２区の喰種はどうやら今までの我々の仕業を１３区の喰種が仕掛けてきていると思い違いをしているらしい。その報復で赴くとのことだが相変わらずの低能共だ。多少ＣＣＧの捜査官を殺った程度で我々の可能性を考えぬとはな。」
真戸さんは、準備をしたまえ。と告げると車に向けて歩き出す。
「今夜、状況が動くかもしれんぞ。今から準備をしよう。」
そう告げられると俺は了承して車に乗り込むと１２区の支局へとむかった。

第４話　喰種漸減作戦

１２区のとある空き地に深夜だというのにいくつもの人影が集まっていた。その集団の中央にいる人物が苛立ちながら傍にいる喰種に声を掛ける。

「集まったのはこれだけか？」

そう聞くと、話しかけられた喰種は焦りながら言葉を返す。

「それなりの連中には全員声を掛けて承諾は貰えたんですが、もしかしたら１３区の連中に……」

そう言葉をきり、今いない連中は１３区の連中にすでに殺られたのでは。と言外に伝えリーダーの男に視線をむけた。

リーダーの男は部下の視線を受け、その可能性は十分にあると思い、今回１３区を襲撃することとなった経緯を思い出す。

１２区の喰種達は１年前から１３区にも勢力を広げようと活発に活動を続けており、１３区の喰種と縄張り争いを続けてきた。１３区の喰種達は１枚岩ではなく、巨腕の元に集まった１２区の喰種達は個々に反抗してくる１３区の喰種達を組織的に撃破し、順調に１３区に浸食を続けていた。しかしその状況は１３区にジェイソンと呼ばれる喰種が現れ、喰種達を率いて暴れまわったことにより状況は一変してしまった。

あと少しで、１３区の全域を支配できるかという時に現れたジェイソン達は次々と１２区の喰種を狩り立て、瞬く間に１２区の喰種達は１３区を追い出された。

その後、しばらくはお互いが派手にぶつかり続けていたのだが、さすがにその状況を見てＣＣＧが重い腰をあげ、１２区と１３区の喰種の駆逐を本格的に開始したのだ。

喰種との戦闘に加え、ＣＣＧとの戦闘も激化し、１２区の巨腕の喰種集団は疲弊した。

気が付けば、戦力は全盛期の半分となり、勢いも下火になりつつある。

しかし１月前、久しぶりにＣＣＧとの大きなぶつかり合いが起き、

その渦中に１３区のジェイソン達が突如現れ、偶然ではあったがジェイソン達と共同で字のごとく、ＣＣＧを皆殺しにしたことで状況は変わりつつあった。ＣＣＧの活動がなりを潜めたことで１２区の食料事情が改善し、戦力の立て直しを図ることができたのだ。状況は好転しつつあると思われた。

だが、ここ最近になり１２区の喰種が多数、行方不明になる事件が頻発していた。

縄張りの喰場には争ったような血痕が発見されており、何者かによる犯行であるのは間違いなかった。

では、誰が。ＣＣＧはつい最近皆殺しにしたばかりである。奴らが再度本格的に活動を始めるには早すぎる。ならば最有力候補の１３区のジェイソン達であると考えるのは、極自然なことであった。過去にも１２区の喰種がジェイソンに襲われ、多数の喰種が攫われることがあり、手口も同じだ。いささか、今回の犯行はジェイソンにしてはやり口が地味であったことが気になりはしたが、１２区の首領である巨腕はこれまでの犯行をジェイソンと断定した。

そして、今日首領の巨腕から直々に指示された、組織のＮＯ．２ともいうべき男が１３区の襲撃を任され、喰種を率いて１３区に出向こうと思いきや、出鼻から挫かれた。当初は２０人集まる筈だった喰種は半分の１０人が集まるのみであった。

喰種は腕時計を見ると、当初の予定から大幅に時間が過ぎていることを確認し、大きなため息を吐き、周りを見渡して、喰種達に声を掛けた。

「いくぞ。もう待てねぇ」

そう言って出発の合図を出し、１３区に続く道を歩き出そうとした時、部下から不安の声が上がった。

「これだけで行くんですか？１３区の連中は手強いって聞きますし、ボスもいないんじゃ、ジェイソンが現れたら俺達……」

弱気な発言を続ける喰種にリーダーの男は無言で睨みつけ黙らせる。

「安心しろ。そこまで深入りはしない。とりあえず何人か攫うだけ

だ」
　それでも不満か？そう語りかけ、これ以上の反論は許さない。そう周りに睨みを聞かせる。そして周りの喰種達はそれ以上文句を言うことはなかった。その程度であれば。といくらか納得するような雰囲気を見せ、ようやく１３区へと出発となった。その部下達を見て、リーダーの男は集まった喰種達の不甲斐なさに再度溜息を吐き、気持ちを切り替えると集団の先頭を歩み始めたのだった。

　薄暗い路地を喰種達は音を立てずに歩き続ける。喰種達の表情は僅かに固く緊張しているように見える。もう少しで、１２区を越え１３区のジェイソン達が支配している縄張りに足を踏み入れるからだ。
　そうして喰種の集団が１３区に続く細い路地を通りかかった時、ふとリーダーの男が立ち止まる。
「なにか、くせぇな」
　リーダーの男が自慢の嗅覚と経験により何かが路地にいる気配を感じ、警戒しながら立ち止まった。
　そして自分達の進行方向に何かが潜んでいると確信した瞬間、上から空き缶のような物が彼らの足元に転がり落ちてきた。
「なんだ？」
　喰種の一人がそう呟いた瞬間、リーダーの男は、それが何かを悟り、周囲に大声で警告しようとしたが、それは間に合わなかった。その大声よりも一瞬先に早くその空き缶状の物が強烈な閃光と炸裂音を路地にまき散らしたからだ。
　その閃光を直視した喰種達は夜の暗闇に慣れていた目が強烈な閃光に晒されたことにより一時的に視界が真っ白に眩み、至近距離で発生した強烈な炸裂音で聴覚までもが、使いものにならなくなっていた。
　急に五感の内二つを奪われた喰種達は平衡感覚を失い、四つん這いになりながら、敵襲だと騒ぎ立てる。
　何人かの喰種がパニックになったのか、カグネを露わにし襲ってく

るだろう敵から身を守ろうとカグネを振り回すが、近くにいる味方を吹き飛ばし余計に状況を混乱させていく。
「落ち着け!!」
リーダーの男が目を抑えながら周りに声を掛けるが全く意味をなさず、それを嘲笑うように混乱の中さらに襲撃者たちが攻撃を開始する。
近くの建物の2階から突如、サブマシンガンを持ったＣＣＧの捜査官達が現れ、指揮官の合図の元、弾丸を喰種達に向かって斉射したのだ。
頭上から高レートで発射される弾丸は雨のように喰種達を襲い、捜査官達はものの数秒でマガジンに装填されていたＱバレットといわれる対喰種用弾丸を撃ち尽くし、喰種の過半数以上にいくつもの浅くない傷を負わせていた。
そしてその銃声が鳴りやむと同時に二人の捜査官が路地の影から飛び出してくる。
この頃にはようやく視覚を取り戻し、弾丸の雨を耐え抜いた喰種達がよろめきながら立ち上がり、痛みに耐えながら次の襲撃に備え始めるが、集団の外周部にいた喰種にとってその対応は遅すぎた。
喰種達の進行方向から飛び出してきた捜査官二人は、クインケを手に持ち、今正に喰種に斬りかかる瞬間であったのだ。
両薙刀を手にした安室は並走していた真戸上等を、追い抜き正面にいる喰種に斬りかかる。
喰種はようやく視界を取り戻したばかりであり、その一撃に気が付いた時には既に手遅れであった。
安室は喰種の横をすり抜けながら、横切る瞬間に薙刀の刃を喰種の首に流れるように添え、少しの抵抗も感じることなく首を斬り落とし走り抜けていく。更にスピードを落とすことなく自らの進行方向にいる喰種の頭を次々に斬り落としていき、安室は集団の中央にいる、リーダーらしき男が周りに必死に指示を出し、集団の態勢を整えようとしている姿を目敏く見つけると、その喰種に向かって突撃する。喰種はこちらに向かってくる安室に気が付き、すぐに迎撃態勢を整え、

自らの間合いに入ったことを確認すると、肩甲骨部分より露わにしたカグネを大きく振るった。しかし安室はその攻撃を予知しており体をほんの僅かにそらすのみで回避し、横を過ぎていったカグネに刃を突き刺して、そのまま喰種に向かって突き進むことで、カグネを2枚に下ろしていく。喰種は引き裂かれていく自らのカグネを見て、すぐさまカグネで安室を絡めとろうと動かすが、その時には、すでに安室は刃をカグネから抜いており、上体を地面すれすれまで倒し、這うように走ることでカグネから回避する。そして安室が自らの間合いに喰種を捉えると喰種に向けて両薙刀を振るうが、喰種は隠していたもう1本のカグネでなんとかその一撃を防御することに成功する。動きが止まった安室を両腕で組み倒そうとした時、喰種は信じられない光景を目撃した。防御に使っていたカグネがまるで、溶断されるかのように受け止めていた部分が斬り落とされ、そのまま前に出していた右腕ごと断ち切られたのだ。それに驚愕し、安室が持つ両薙刀の刃が先ほどより、赤くなっていることに気が付くが、喰種はそれについて深く考える暇を与えられなかった。安室はすでに2撃目を放っていたからだ。喰種はなんとか後ろに下がることでそれを回避し、縦に引き裂かれたカグネも防御に回し、安室の攻撃をそらしたが、完全にとは言いがたく、安室の攻撃が振るわれる度に、カグネは引き裂かれ、体にも傷をいくつも作り、致命傷を避けるだけで、喰種は精一杯であった。

そして、喰種はついにカグネを完全に断ち切られ、再生する余裕すら与えられず、安室は喰種の隙を突き、必殺の刃を喰種の首目掛けて振るった。その軌道には一切の障害はなく、喰種にも避けることが不可能だと自覚させられた。喰種は自らの死を覚悟し、せめて最後まで下手人の人間を睨みつけようと、目だけは反らさず、その瞬間を待ったが、刃は首の皮1枚を斬るのみで、喰種の首の寸でのところで刃は止まっていた。

「あぶねっ!!」

安室はやや冷や汗をかきながら、ぎりぎり所で今回の目的を思い出し、この喰種を殺すのはまずいと判断したことで止めの一撃を思いと

どまったのだ。そして喰種に大丈夫？等と聞く始末である。
喰種は、なぜ刃を止めたのかよく分かっていなかったが、相手が隙を作っていることを確認し、視線は安室に向けたまま、勢いよく後ろに下がり距離をとる。そして、怒りに任せ相手を怒鳴りつけた。
「てめぇら13区の連中じゃねぇな!!CCG共が!!」
そう喰種は怒鳴り散らすが、安室は何を今更。と顔を顰めるのみであり、再度クインケを構え直す。そして喰種は背中に力をこめ背中が泡立ち新たなカグネを露わにし、再度戦端を開こうと、構えようとしたその時、仲間の悲鳴が耳に入った。喰種は一瞬そちらに眼を向けると、そこには奇襲で戦闘不能になった喰種や今だ意識がはっきりしない喰種を楽しそうに殺し回る捜査官が目に入ったのだ。そして喰種とその捜査官は偶然であったが目線が合うと捜査官は不気味な笑みをこちらに向け語りかけてきた。
「なにか用かね？」
何でもないように尋ねる捜査官は、目線だけを喰種に向け、手を止めず、近くにいた喰種に刃を突きいれていく。
その反応をみた喰種は怒り狂い、捜査官を怒鳴りつけた。
「やめろ!!」
仲間をまるで虫けらを潰すかのように殺し続ける捜査官を見て、喰種は理性を飛ばし、その捜査官に斬りかかろうとする。だが、喰種は正面にいる安室にもっと注意を払い続けるべきだった。
喰種が正面の気配に気が付き、前に向き直った時には、安室は喰種の目前に迫っていた。
安室はすでに喰種が気配に気が付いた時には自らの間合いに喰種を捉えていた。安室の一撃はカグネを一撃で両断し、返しの2撃目で両腕を一振りで切り落とす。更に体を回転させ逆の刃で喰種の右足を態勢を低くしながら掬い上げるように切り落とすと、やっと安室は動きを止め、喰種は地面に崩れ落ちる。喰種はなおも必死に這いずるものの、安室は念を入れて残った左足に刃を突き入れ喰種の四肢を全て切り落としてみせた。
喰種はそのような状態になりながらも、周囲に散らばる自らの四肢

を見て気を失いそうになるが、激痛に耐え最後の気力を振り絞って喚き散らした。
「てめぇら!!許さねぇ!!絶対に喰ってやる!!絶対に喰ってやるからな!!」
その喰種を見て、安室は元気だなぁと、喰種の生命力に関心しつつ、特に喰種の言葉に取り合わず、倒れ伏す喰種の顎目掛けて蹴りを放ち、物理的に喰種を黙らせた。
「いやー喰種の生命力は半端ないですね。こんなになってもピンピンしてるんですから」
そう話しかけた真戸上等は丁度、最後の1体にとどめを刺し終えた所でだった。
「奴らはゴキブリだよ。君も知っているだろう?しかし首はまずい。君がその情報源の頭を落としかけた時には肝が冷えたよ」
そう言いながら、真戸上等はクインケを一振りし、血を払い落す。そして二人で軽口を叩きながら、敵の増援が来ないか警戒していると、2Fからサブマシンガンを持った三原捜査官と局員達が近づいてきた。
よく見ると三原捜査官は顔を青ざめ、後ろにいる局員達の何人かは、死体が喰種とはいえ、外見は人間と変わらない物たちの凄惨な状況を見て、吐き出す者までいた。
「お、お疲れ様でした。喰種の輸送準備は手筈通りすんでおります。これより輸送を開始しますがよろしいでしょうか」
いくらかびくつきながら、話しかけてくる捜査官に真戸上等が答える。
「そうしてくれ。君達の射撃も素晴らしかった。支局長にもよろしく伝えておくよ」
その言葉にいくらか恐縮しながら、捜査官達は安室がボロボロにした喰種を拘束して車へ乗せていき、死体も無造作に積み込んでいく。待機していた車両は次々と12区の支部へと出発して行った。
その間も、安室達は周囲を警戒していたものの特に、何かが起こることもなく時間が過ぎていく。

そして最後の1台が出発したのを確認し、三原捜査官が作業が完了したことをこちらに報告してくる。
真戸上等がそれに返事をし、我々も撤収すると伝え、安室に声を掛けようとした時、安室の様子が変わっていた。
安室は13区に続く細い路地、喰種達が進もうとしていた先を睨みつけるようにして見ていた。
それを見て、真戸上等が安室に近づき話しかける。
「何か、来るかね？」
そう聞かれた安室は少し間をおいて答える。
「でかいプレッシャーが一つ近づいて来ます」
安室は、地下探索任務でもそう感じることはなかったプレッシャーを感じていた。悪意と憎悪を混ぜ込んだもの。そんなものが近づいてくるのを能力で察知していたのだ。
真戸上等は安室の発言について考える。安室の言葉を疑う気は一切なかった。安室という男がこういった言葉を吐くとき、外れたことがないからだ。それに自分の直感も何かが来ると騒いでいる。そして安室が珍しく、よくプレッシャーと表現する言葉に更にでかいという形容詞までつけており、その方向は13区から。
まだ、姿は見えないものの、真戸上等は自らの勘を信じ、近くにいる捜査官に話しかけた。
「君は退避したまえ。それと黒巌特等に伝えてくれないかね？ジェイソンが現れたとな」
その言葉に三原捜査官は姿が見えない敵にどうしてそこまで言いきれるのか。甚だ疑問に思ったが、僅かな時間ではあるが一緒にこの二人と捜査をし、この二人が異常だということは十分に理解していた。また上司からの命令でもある。
三原捜査官は二人の言葉を信用し、すぐに呼んできますので、ご武運を。そう告げ、車両に走り去っていく。
真戸上等はそれを見届けると、安室の横に立ち、二人は1分程無言で通路の先に視線を向けていた。すると僅かに足音が聞こえてくる。そして足音が大きくなるにつれ、徐々にその正体が露わになっていっ

た。
大柄な体格に顔にはホッケーマスク、片手には大型のレンチを持つ男がこちらに歩いてくるのだ。正にホラー映画のワンシーンである。
本来なら、そのようなものを現実で見れば恐怖ですぐ様、逃げ出すであろうがその怪物の前に立つ二人は普通ではない。周りから見れば十分異常者の二人である。案の定二人は、自分達の予想が当たり、笑みを深くしていた。
そして、ホッケーマスクの男、ジェイソンも二人を見て、立ち止まると仮面越しで顔は見えないが、笑みを見せているように感じられた。ジェイソンが口を開く。
「おや、僕は１２区の喰種に用があってここに来たんだけど、なんで白鳩がいるのかな？連中は僕の玩具にする予定だったんだけど？」
ジェイソンはそう言うと、捜査官達から周りに視線を移し、ここでなにがあったかを確信する。死体を片付けたとはいえ、血の跡などはまだ、いくらでも残っており、喰種の嗅覚であればすでにこの場でなにが起こったか、口に出す前からほとんど分かっていたのだが、あえてジェイソンは口に出して捜査官達に尋ねたのだ。
「人の獲物を獲るのはよくないんじゃないかい？せっかく彼らを１３区で待っていたのに幾ら待っても来ないもんだから、こちらから出向いたらこの有様だ。さて、俺はどうすりゃあいいんだ？」
ジェイソンの口調は最初、柔らかいものであったが、最後は捜査官達を威圧するものに変わっていた。
だが凄まれた二人は全く意に介さず、真戸上等が口を開く。
「君は１３区のジェイソン君で間違いないかね？」
真戸上等は柔らかい口調で、問いかけると、ジェイソンはやや不満そうに答える。
「質問に質問で返すってのは相変わらず白鳩ってのは礼儀を知らないようだね。で、だったらどうすんだ？」
そう返したジェイソンに真戸上等は満面の笑顔で答えた。
「肯定と判断させて貰うとしよう!!ジェーイソォォォーン!!」
真戸上等はそう言いきる前にはクインケを展開し、ハイテンション

でジェイソンの名前を叫び散らして、レイピアで斬りかかる。しかしその攻撃はジェイソンのレンチで軽々といなされ、余裕の表情でジェイソンがこちらに向かって語り掛けてくる。

「いいぜ。お前達で遊んでやるよ!!」

そう言うと、真戸上等の攻撃を軽々と避けていたジェイソンは、一転して攻勢に出た。最初は真戸上等も攻撃を混ぜ込でいたものの、ジェイソンの動きがどんどん速くなり、真戸上等はついに押され始め防御で精一杯となる。そして真戸上等はレンチの大振りによる1撃を真正面からレイピア越しに受けてしまい、その衝撃で後ろにたたらを踏んでしまう。そんな隙をジェイソンが見逃す筈もなく、隙を見せている真戸上等に殴り掛かろうとするが、安室が援護するようにジェイソンの横合いから斬りつけた。しかし先ほどの喰種とは違い、安室にも気を配っていたジェイソンは、殴りかかろうとしていた態勢から、安室の一撃をよける為の回避行動に一瞬で切り替え、安室の一撃を危なげなく回避すると、お返しにレンチで殴り掛かる。ジェイソンの攻撃は人間にとってまさに一撃でも食らえば即、戦闘不能になる威力を伴っていることはその腕の太さ、そしてそのスイングの速さからも明らかであったが、安室は特段物怖じすることはなかった。当たらなければどういうことはないのだ。

安室はジェイソンのレンチによる攻撃を体を僅かに反らすのみでかわし、まれに上着を掠るものの、安室の表情からは余裕を感じられた。そして、ジェイソンの大振りを誘発したその時、安室が反撃を開始する。安室は空振りしたジェイソンの隙を突き、薙刀をフルスイングした。しかしジェイソンの反応スピードも大したもので、ジェイソンは咄嗟に回避し、スーツをわずかに掠めるだけで不発に終わってしまう。その後二人は何回か打ち合うものの決め手が放てず、示し合わせたかのようにお互いが距離をとった。

そしてジェイソンが安室に先ほど斬られた部分を目にすると、横に一閃、ネクタイを切り落とされ、僅かに白いスーツに血が滲み、赤く染めていた。

「やってくれるね。お気に入りのスーツなんだけど、どうしてくれる

んだ？」
安室がスーツをよく見ると、それなりに上等なものだと気が付く。喰種にしては大切に扱っているようだ。
ジェイソンはそのスーツを安室に傷つけられたことに中々ご立腹らしい。
安室は「知るか。馬鹿」と適当にジェイソンに返答すると、「お前は玩具確定だ」そう安室に宣告し、自らの指の骨を安室に見せつけるように鳴らす。
そんな姿を見て、安室は、なにそれ？カッコいいとおもってんの？さむいんだけど。そう挑発しようとして口を開こうとした時、安室の背後から真戸上等が奇声を上げてジェイソンに突っ込んでいった。
安室はその姿を見て、歳考えようぜ。と思うものの真戸上等にとって久しぶりの大物である。いうなれば、禁欲生活を強いられた獣が美女を目の前にした時のようなもので、その興奮もしかたない。そう考え、真戸上等に心の中で声援を送った。がんばぁー
「ジェェェイソォォン!!」
真戸上等はジェイソンの名前を繰り返し叫び、攻撃を仕掛ける。案外冷静なのか、その攻撃は的確にジェイソンの防御の隙を狙うもので、ジェイソンも反撃をしにくそうにし、手こずっているようだ。
俺もその姿を見て援護に回ろうとした時、ジェイソンが咆哮する。
「しゃらくせぇ!!」
そう吠えると、ついにジェイソンは巨大なカグネを露わにし、真戸上等を貫こうとした。だが喰種の最大の武器であるカグネを忘れる捜査官等いない。むしろ今までジェイソンがカグネを温存していたせいで、戦い辛かったほどである。真戸上等は突如現れたカグネに対して、大きく後ろに下がるようにその巨大なカグネの一振りを回避する。しかしそれをジェイソンも追い、片手に持ったレンチで殴り殺そうとするも、安室が後ろに下がった真戸上等と入れ替わるように、前に出て、ジェイソンに斬りかかる。安室はジェイソンの腹部を切り裂いてやろうと、スピードを重視した1撃を放った。だが、ジェイソンはそれを片手に持っていたレンチだけで、受けてみせ、もう片方の腕

で俺の薙刀を掴み取った。
「離さねぇぞ！」
安室は自らのお気に入りのクインケを無遠慮に触られ、取り上げようとしてくる喰種に腹が煮えたぐりそうな思いになるも、いかにこの喰種からクインケを取り返してやろうかと考えようとした時、背後からの気配に安室は気が付き、ジェイソンに抵抗することなく、クインケから手を放した。
「あ、はい」
そうジェイソンに返事をした安室は、クインケを手放すと、上体を思い切り横に反らす。
そして、安室が横に体をそらしたことで、ジェイソンから安室の背後にいる者の姿が露わになる。それは、黒いボーガンを手に持ち、すでに引き金を引いていた真戸上等の姿であった。
真戸上等は安室が横にずれたと同時に矢を放ち、ジェイソンが気が付いた時には、すでに矢は高速で放たれていた。その狙いは寸分の狂いもなく、ジェイソンの顔目掛けて、高速で飛来する。最高のタイミングでの1撃であった。安室はくたばれ。と内心でジェイソンを罵り、頭を串刺しにされる光景を想像する。しかし、その光景が訪れることはなかった。
矢の軌道には一切の障害もなく、ジェイソンの頭目掛けて飛んでいく。だがジェイソンは近距離から高速で放たれた矢を顔面すれすれで、両手で掴み取ったのだ。あと数ミリで、頭部を吹き飛ばした1撃は間一髪で防がれてしまう。
矢を掴み取ったジェイソンの手の平からはいくらかの血が流れ、矢の返しが血液に反応することで、僅かばかり肥大化し、手のひらを傷つけてはいたが、喰種にとっては、軽症にもならないだろう。安室はその光景を見届けながら、ジェイソンが振るうカグネを避けつつ、矢を掴み取った際にジェイソンが投げ捨てた自らのクインケを回収し、後ろに下がると真戸上等の横に並ぶ。
そして、ジェイソンが矢を投げ捨て口を開く。
「惜しかったなぁ？今のは俺も焦ったぜ？」

ジェイソンは獰猛な笑みを仮面越しにして見せ、手の平の傷から僅かな蒸気を出し、傷が瞬く間に癒えていくのが見えた。
「久しぶりに楽しませてくれるじゃねぇか。そっちのじじいも気に入ったよ。持ち帰り確定だぜ？ちょっと本気になりそうだ!!」
そう言うと、露わにしていたカグネは先ほども十分に巨大だったというのに、更に大きさが増し、カグネの外皮からは脈打つ血管のようなものが、目立って見える。どうやら、ジェイソンは言葉通り、遊びから本気になったらしい。
「ふむ。さすがに黒巌が手古摺るだけはあるな。安室君、前を任せてもいいかね？」
真戸上等は、ジェイソンの本気を見て、先ほどの狂乱が無かったかのように冷静に状況を分析し、安室に前を頼むように尋ねる。
「任せてください。動きも大分見えてきましたし、二人でなら、次で決めれそうですよ」
そう、ジェイソンに聞こえるように自信満々で安室は真戸上等に言葉を返すと、ジェイソンに挑発するように笑って見せる。
そして、ジェイソンもそれに仮面越しから笑って見せ、お互いがカグネとクインケを構えた所で、突如サイレンの音が響き渡った。
路地の両方からＣＣＧのパトカーが存在を誇張するように、サイレンを鳴らし、パトカーからはＣＣＧの捜査官が次々と降りてきており、指揮官らしき男を先頭に、ジェイソンに近づいてきていた。
その光景を見たジェイソンは舌打ちすると、真戸上等と安室に声を掛ける。
「命拾いしたようだな？今日はこのくらいにしておいてやる。お前達の顔は覚えたぜ？１３区が片付いたら挨拶に行ってやるから待ってろ」
そう捨てセリフを吐いてこの場から逃げ出そうとするジェイソンに安室は挑発する。
「逃げるの？逃げれると思ってんの？」
安室はそう挑発し、逃がす気はないと言い放つが、ジェイソンは余裕を持って答える。

「見逃してやるって言ってんだよ。追ってきてもいいぜ？」
そう言うと、ジェイソンはカグネを地面に当て、カグネを器用に扱い、跳ねるようにして飛び上がった。高く飛び上がったジェイソンは近くの建物の壁にカグネを突き刺し、器用に建物を登っていく。
止める間もなく、飛び上がってしまったジェイソンを見上げていると、増援に来た捜査官の先頭に立つ、黒巌特等がジェイソンを見上げながら安室と真戸上等に近づき、「無事か？」
と話しかけてきた。真戸上等がそれに受け答えをするが、安室がそれを全く聞いている素振りは見えなかった。安室はまだ、諦めていなかったのだ。安室も1年ばかり小物ばかりを相手にしてきたせいで、それなりにストレスが溜まっていた事と、ジェイソンのカグネを見て、どんなクインケができるか、妄想が膨らんでしょうがなかった。
安室は、ジェイソンが上っている建物の屋上を見上げ、背中に担いでいた、ウミヘビを取り出し、屋上に見える手摺に撃ち放つ。
ウミヘビは安室の狙い通り、手摺に絡みつくと、そのままワイヤーを巻き取り始め、安室も僅かに後ろに下がり、助走をつけると、ワイヤーを巻き戻す力を利用しつつ、壁を駆け上り始めたのだ。
安室の背後からは、黒巌特等の静止の声が聞こえたが、安室は聞こえない振りをして、ジェイソンの追跡を開始した。
ジェイソンは、丁度屋上に着き、背後を振り返ると、壁を駆け上る捜査官を見やり、「威勢がいいねぇ～」と感心しながら手招きするように安室を挑発し、安室の視界から消えていく。
安室はそのジェイソンの挑発を見て、結構切れていた。
有馬さんだって、現場で喰種を駆逐してナルカミを得たんだ！俺だって。
と、赤い少佐の部下の死亡フラグ満載なセリフを無意識に呟いていたが、本人は気が付いていなかった。
そうして、安室は更に壁を駆け上がるスピードを速め、あっという間にビルを踏破してみせ、勢いあまり、屋上に飛び上がりながら到着すると、安室の視界一杯にジェイソンのカグネが迫っていた。
ジェイソンは安室が屋上に辿り着く瞬間を狙って待ち伏せていた

のだ。安室が屋上に到着し、空中にいる安室目掛けてカグネを思いっきり振るう。
しかし、安室もギリギリでそれを予知し、体を逸らしながらウミヘビの残りのワイヤーを思い切り手繰るようにし、空中での軌道を変え、ジェイソンのカグネをかわしきった。
「やるね～!!」
ジェイソンはその一連の動きを褒めると、カグネで着地した安室を更に追撃する。だが安室はそれすらも、横に転がるようにして、回避し、ジェイソンに向かって突き進み、クインケの間合いに一瞬で距離を詰める。
それにジェイソンも答えるようにして前にでて、レンチで安室に殴り掛かった。
二人は、二合、三合と高速で刃とレンチを打ち合い、火花を散らすが、お互いに決定打を撃てず、ジェイソンが巨大なカグネを横に大きく振るい、それを飛び上がりながら、かわす安室を見てジェイソンは距離をとった。そして、ジェイソンは仮面越しで安室に笑みを掛けると、巨大なカグネを天に向かって掲げる。
安室はその行動を怪訝に思いながら、どう斬り殺してやろうかと考える。
そして、ジェイソンが口を開いた。
「威勢がいい奴は嫌いじゃねぇ。てめぇを玩具にするのが楽しみだ。次は下にいる連中がいねぇ時に楽しもうぜ」
そう、別れを告げるように、ジェイソンが安室に話かけ、安室の返答を待たずに掲げていたカグネを屋上の床に叩きつけた。
安室はその行動の真意にすぐに気が付き、ジェイソンに向かって駈け出そうとするが、ジェイソンの動きが速かった。
床に叩きつけられた巨大なカグネの衝撃に屋上の床は耐えきれず、崩落を始める。安室はそれに巻き込まれまいとするが、範囲があまりに広く、瓦礫と一緒に安室はゆっくりと落下していく。落下していく瞬間、ジェイソンは崩落しなかった屋上の淵に立ち、仮面を外して、安室に笑いかけると、安室の視界から消えていった。

安室はその光景を見て、毒づくと着地に備える。下の階層まではそう高さがなかったお陰で、安室は余裕を持って受け身を取りつつ、着地した。
そして、降り注ぐ瓦礫に注意を注ぎながら周囲を見渡し、ジェイソンがいた場所を名残惜しそうに見上げて、溜息を一つ吐くと下に続く階段を探す為、その場を後にした。

あぁ。Sレートを逃がした。非常に残念である。誠に遺憾である。俺はどうすれば、奴を逃がさずにすんだか。奴でどんなクインケを作れたかと、未練たらたらで1階までの階段を下がり、真戸さんと黒巌特等が待つ、先程の現場に戻ってきた。
近づく俺を見つけた真戸さんと黒巌特等は真戸さんは無事かね？と語り掛け、黒巌特等は無言で俺に近づいてきた。
俺は真戸さんに、無事だと、肯定の返事をしようとしたが、目の前まで来た黒巌特等が俺の肩に手を置くことで、中断せざるを得なかった。
「うむ」
そう言って俺の目に黒巌特等は強烈な視線を当ててくる。俺はなんだ？と考えると嫌な予感が頭を過り、それが確信に変わり、恐らく訪れるであろう未来に備え身構える。修正されてやる!!
そして、頬に衝撃が走った。
体に浮遊感を感じ、刻が見えた気がする。あぁこれが若さか。（若くない）
いくらかの浮遊感を感じ、俺は地面に倒れ、軽い脳震盪になりながらも、俺は立ち上がろうとしつつ、必死に考えた。殴られた理由はなんとなくだが分かる。しかし今はそれはどうでもいいのだ。どうする？あれを言うべきか？しかしこの歳になって、捜査官達の注目が集まっているこの状況で言っていいのだろうか。俺は羞恥心と格闘し

ながら、その言葉を言った未来を考える。間違いなくガチの特等パンチがもう1発飛んでくるに違いない。本家様は平手で済んでるのに、俺は特等ゴリラのグーパンってどういうことだよ。そして、考え抜いた挙句、俺は言わなかった。言えなかったのだ。羞恥心に加え、言った後の未来を想像し、ひよった。なので、心の中で叫ぶ。

殴ったね!!親にも殴られたことないのに!!

とりあえず、お約束を心の中で叫び、ノルマ的なものを済ませる。だらしねぇ。

糞どうでもいいことを考えて、震える足で何とか立ち上がり、心の中でそんな言葉を吐いていたせいか、僅かに黒巌特等を睨みつけるようにしてしまった。周囲の捜査官は無言でこちらを緊張するように見ているが、俺は何かするつもりはない。

いくらか、黒巌特等と視線が交差した後、俺は素直に頭を下げてごめんなさいをした。

数秒頭を下げ、顔を上げると、また黒巌特等がこちらを幾らか見た後、うむとだけ言い、優しく肩を叩いて、後ろの部下達の元に歩き去っていく。

俺は黒巌特等のプレッシャーから解放され、力が抜けてしまい、崩れ落ちそうになるが、真戸さんが傍に来て、肩を貸してくれたおかげでなんとか倒れずにすんだ。

「無事かね？」

さっきまでは、自信を持って肯定したのだが、地下での捜査以来のダメージである。

「さっきまでは無事でしたよ」

俺は、うんざりしながら真戸さんに返事をした。

「あまり、悪く思わないでくれ。黒巌は不器用な男でな。君を思っての行動だろう」

それは分かっている。殴られた時に感じた感情は、俺の事を心配しているものだった。だが、あの人は自分の力を分かってるのだろうか。俺じゃなきゃ、首飛んでたんじゃないか。前世だったら死んでた自信があるぞ。

俺は聞こえるかどうかの声量で、車までの道のりをグダグダと不満を言う。
「あぁー、とりあえず、ひと段落したらもう1度謝りに行きますよ」
俺は自分の行動がまぁ悪いのだから、しょうがないと諦め、落ち着いたら黒巌特等に、もう1度謝罪しに行くと真戸さんに告げる。
「本人も気にしているだろうから、そうするといい。それと私も君が抜け駆けしたことに不満を持っているのだがね」
真戸さんは本気で言ってるか冗談なのかわからない口調でそう言ってきた。
「すいません。謝りますんで反省するんで、修正はやめてください。死んでしまいます」
そう返すと、真戸さんは笑いながら冗談だ。と言って俺をねぎらってくれた。
ほんま、いい上司ですわ。
俺は真戸さんに連れられて、車両に到着すると、真戸さんが車を発進させる。
そして、支局へと車を向けると、俺に語り掛けてくる。
「安室君。とりあえずジェイソンの事は忘れたまえ。奴については13区の黒巌たちが捜査を行う。我々は今回捕獲した巨腕の関係者から情報を引き出し、巨腕を駆逐するのが仕事だ」
今回の目的を改めて、俺に諭すように言ってくる。
「私は、捕獲した喰種の尋問を明日からでも開始する。君は明日は休んでいたまえ。なに、今日の鬱憤は近日中に巨腕で晴らせるだろう。それまで僅かな時間ではあるが我慢していてくれよ」
真戸さんは俺にジェイソンを追うな。巨腕と近い内に戦えるから我慢しろと、言外に言いくるめてくるが、そこまで無謀ではないし、消息をたった喰種を追える程俺の捜査力は高くない。それに巨腕を近いうちに殺れるのだ。全く不満はない。
「不満はありませんよ。巨腕を狩れるんですから楽しみにしておきます」
そう言うとお互いに、喋ることもなくなり、支局までの道のりまで

は、お互い思案に耽っていた。そして久方に充実した短かった夜が明け、支局に到着する頃には、朝日が俺達を照らしていた。

後日、俺と真戸さんは捕獲した喰種から巨腕の喰種の拠点に関して、情報を引き出すことに成功し、巨腕の喰種を討伐することに成功するのだった。

第５話　４区突入

安室と真戸が巨腕を討伐して1カ月が過ぎようとしていた。当初、１２区は二人からの討伐連絡を受け大荒れとなっていた。それもその筈である。二人は１２区の支局に何も告げず、喰種討伐に赴き多くの喰種と巨腕という大物を討ち取ったのである。１２区の支局はなんの準備もしていなかったことにより、大慌てで支局員を総動員し、事後処理に当たる事となったのだ。そしてようやく落ち着いた頃に二人は無断出撃を咎められ、残党狩りは応援に来た捜査官に任せることになり、二人は後任として近日にやってくる準特等との引き継ぎ業務に当たれと支局長から言われ実質現場へ赴くことを禁止されていた。

「暇です」

安室は机に突っ伏しながら、隣の机に座る真戸上等に声を掛ける。真戸上等はというと机の上に広げられた資料に目を通すばかりで、軽く安室に目線を向けると一応の反応を見せた。

「仕方あるまい。現場には行くなと支局長直々に釘を刺されてはな。まぁ久しぶりにゆっくりできるのだ。本局に戻ればまた任務を言い渡される。それまではゆっくり過ごしていたまえ」

そう言うと、また資料に眼を戻してしまい安室はどうすることもできず、溜息を吐いた。

引き継ぎ資料なんてものは真戸上等が1日で仕上げたことで安室は暇の極致にいた。

一応、真戸上等からいずれ上位捜査官になるのは間違いないからと、法規関係の資料を渡されているのだがどうにも勉強という気分にはなれず、うんうんと唸るばかりであった。

安室がぶつぶつと不満を独り言のように呟いていると、真戸上等が見ている資料が視界に入りいくつかの単語を見つけ真戸に話しかける。

「それって、もしかして巨腕の赫包に関する資料ですか？」

「あぁ。先日解析結果が届いてな。今博士と加工方法を相談中だ。Ｓ

レートだけあって上質だな」
　そこから赫包についての詳細なデータを真戸が安室に伝えて来るが、そこまで専門的なことを分かっていない安室は、ほとんど理解していなかった。本家をリスペクトしているくせに、そこらへんを怠っているところがこいつの半端なところなのである。
「ですけど、本当に貰ってよかったんですか？良質なら余計、真戸さんも欲しかったでしょ？」
「君が止めを刺したのだ、所有権は君にある。それに設計を私にさせてくれるのだからそれで十分さ。気にすることはない」
　真戸上等はクインケの設計を自分がすることを条件に安室に巨腕の赫包を譲っていた。
　戦闘を除けば、捜査の主導は真戸上等が行っており安室が役に立ったのは、本当に戦闘だけで安室自身もそれを理解していたことと、最近羽赫のクインケを貰ったこともありいくらか申し訳なさを感じていた。
「まぁ頂けるなら貰いますけど次は真戸さん貰ってくださいよ？なんか申し訳なさが半端ないので。あ、羽赫だったら競争にしましょう」
　その返事に真戸は苦笑しつつ、期待している。と言って二人はクインケについての話題で話が盛り上がる。
　そして、最終的に安室が訓練場で体を動かそうという話がでるまで、二人はクインケ談義で盛り上がっていた。

　１２区での引き継ぎが終わり、二人は本局に数か月振りに帰還していた。
「二人共ご苦労だった。しかし、無断出撃に加え喰種への過剰な尋問に関して１２区より苦情が来ている。少々過程でやりすぎだな」
　帰還して早々二人は、任務を言い渡した本局局長の和修吉時に呼び出され１２区での労いと、規律を犯した件についての叱責を問うてきた。

真戸と安室は既に１２区での詳細な報告書を作成し本局にも送っていた事と、１２区の支局長からの報告で、本局も大体の状況はつかめていることは承知していた。なので二人としては、無断出撃に関しては、事前に１２区の支局に襲撃することを伝えた所でストップがかかり、いつ来るかもわからない増員を待たされ、その間に巨腕が拠点を移し、捜査が振り出しに戻ることを嫌い実行に移ったこと。過剰な尋問に関しては、喰種の抵抗があったとねつ造・・・事実があったことでやむを得なかったことを報告書に記載していたことから、この場で二人は、特に何かを言う気はなかった。

「巨腕を討伐する為とはいえ、規律を守らなくては組織は成り立たない。それは分かるだろ?故に組織であるＣＣＧの長として君達に何かしら、罰さねばならない」

そう言って、一拍置くと。

「君達の今回の功績である巨腕及びその他の討伐という功績を鑑み、処罰は無いものとする。しかし今回の功績に関しては一切評価されない」

そう言い終えて、局長は一つ溜息をついてから、幾分か口調を柔らかくする。

「次からはもう少し内部に気を配ってくれ。こちらとしても君達みたいな優秀な捜査官を罰したりはしたくないんだ。全く、変な苦労をさせないでくれよ」

局長は苦笑いで二人に語り掛け、次からはもう少し規則を重んじるようにと、注意を促す。

それに真戸と安室も迷惑をかけたことに対して謝罪すると、局長からこの話題は終わりだと告げられ、これからに関して話し出す。

「今後に関してだが、とりあえず二人はペアを解散してもらう。理由は実質二人共準特等以上の能力を有していることが原因だが、真戸には新たな新人の育成を行ってもらう。去年のアカデミー主席卒業のホープだ。頼むぞ。安室に関してだが、宇井君から安室に対して指名が入った。相手はＳＳレートと今までとは違う相手だ。心してかかれよ。ともに重責ある任務だ。健闘を祈っている」

最後に激励の言葉を貰うと、話は終わり二人は部屋を後にした。
部屋を出た後、安室は不満たらたらであった。まさかのペア解散である。まだ1年と半年程度だというのに、早くない？と不満を真戸上等にぶちまける。ちなみに処罰に関しては功績がなくなっただけなので、二人にとってはそこまで気にすることではなく、すでに二人から記憶の片隅に追いやられていた。
「なに、そういう事もよくあることだ。1年半君と組めたことは私にとっても色々勉強させてもらったよ。それに楽しませてもらった。私も残念でならんが教えられることもそう多くはない。宇井君とSSレートを相手にした方が君にとって勉強になろう」
「んークインケに関してとか色々教えてほしかったんですけどね。残念です。真戸さんも主席卒業のエリート相手に教育らしいじゃないですか。頑張って下さい」
それと今日飲み行きましょ！送別会しましょう!!
あぁいいとも。と真戸は笑顔で答え、安室はいくらか名残惜しそうに別れを告げ、二人はそれぞれに指示された場所に向かうことになった。

安室は局長より指示された場所へ一人歩いていく。そして案内された場所に入室すると、顔見知りの先輩が机に座り、疲れた顔をしてこちらに視線をむけてきた。
「あぁ。安室か。よくきた。ここ最近色々な意味で大活躍だったそうじゃないか」
「宇井先輩も上等に昇進した上に有馬班で活躍してるって聞きましたよ？さすがっすね」
安室に軽い嫌味を投げかけながらも、久しぶりによく面倒をみた後輩を見て、笑みを作り出迎えたのは、安室の元直属の上司であり先輩である宇井郡上等であった。安室も宇井の評判を聞いていたので、昇進の件も加えて賞賛を送る。
その後、いくらか二人は雑談を行い仕事の話に移る。
「今回、安室を呼ばせてもらったのは、私が新たにSSレートの対策

チームを有馬さんに変わって指揮することになったからさ。下位捜査官であれば都合つけてくれるって局長に言われて、安室を指名させてもらったんだ。他のメンバーは明日にでも紹介するよ」
「有馬さんの代わりって凄いですね。しかも相手はＳＳって中々やりがいがありそうです」
　そう気軽に返答した安室に宇井はげんなりする。
「本当は有馬さんの仕事の筈だったんだ。だけど別件で担当できなくて。有馬さんからお前ならできるって言われて気が付いたら、捜査指揮任されたんだぞ？全くこちらとしてはたまらないよ。大体、有馬さんはそういうとこが・・・」
　どうやら今まで大分苦労させられたのか、零番隊や有馬さんの愚痴がどんどんこぼれていく。
「って、お前に言う事でもなかったな。まぁそういうことでこれからは私とペアを組んで一緒にＳＳ追うことになるからよろしく。チームも近いうちに全員揃うから、準備ができたら乗り込むよ」
「ＳＳレートか・・・果たしてどんなクインケができることやら」
　ＳＳレートともなると、夢のビームライフルやらビームサーベルも現実味を帯びて来るのではないか。そう安室は期待しながら、ニヤニヤしていると、その姿を見て宇井はこいつも普通じゃなかった。と安室を指名したことを不安に思いつつも、実力からみれば、頼もしいことこの上ない。現に、真戸上等と協力してではあるが、Ｓレートを悉く討伐し、ジェイソンとも単独で相対したという話も聞く。ようは扱い次第だ。と思いながら、また苦労が増えることを考えると宇井はもう１度溜息を吐いた。

「そういえば、先輩今日時間あります？真戸さんと今日飲む予定なんですけど、よければどうですか？なんでも真戸さんが新しく組むっていう去年の主席君も来るらしいんですよ」
　安室の誘いを受けて、宇井は少し考えてから、真戸上等から安室の扱い方を教わることもでき、主席卒業の期待のルーキーとも面識を持てるいい機会だと判断する。

「いいよ、丁度仕事も片付きそうだし。真戸さんからお前の事を詳しく聞きたいしな」
ぶっきらぼうに言いつつも、久しぶりに力を抜ける飲み会に参加できることに幾らか楽しみにしつつ、それを安室に気取られたくないのか、仕方ないなぁと。宇井は了承した。
「じゃあ、今日の夕方にでもまた迎えに行きますね」
安室は一言宇井に告げ、それでは。と部屋から出ようとした時、宇井から資料を押し付けられ、これから訓練所で体を動かそうとしていた安室に、読んどけ。と釘を刺してから安室を退室させた。

◆◆◆

無事に予定の時間までに仕事を終え、俺と宇井先輩が予約していた居酒屋の個室に着くと、そこには既に真戸さんと姿勢よく座っているＴＨＥ　好青年と言わんばかりのガタイの良い主席君が到着していた。主席君は俺達を目にすると立ち上がり、俺達に頭を下げながら挨拶をしてきた。
「亜門鋼太郎です。本日はお招き頂きありがとうございます。お二人の活躍はアカデミー時代から耳にしていました。よろしければお話を聞かせていただけたらと・・・」
外見通り、礼儀正しく丁寧な挨拶をしてくる主席くん改め亜門君。俺はよろしくーと簡単に返すと隣にいた宇井先輩はいいなぁ。常識人っぽくていいなぁ等と俺と見比べながら呟いている。なんだろう。凄く馬鹿にされてる気がするぞ。
宇井先輩はそんなに畏まる必要はないよ。と適当に亜門君に返事すると俺と宇井先輩は席に着いた。
「宇井君とは直接会うのは久しぶりだね。安室くんの件については明日にでも纏めてメールで送るとしよう」
真戸さんがなにやら宇井先輩と気になることを話していたが、お前は気にしなくていい。と宇井先輩から言われてしまったので、まぁいいかとスルーした。気になる話でもなさそうだしなぁ。とりあえず、

二人の話は無視し乾杯をしてからいくらか話していると、亜門くんから話しかけられる。
「安室一等はジュニアからの異例の飛び級を果たしたと聞いていました。未だ安室一等が出した記録はジュニアはおろかスクールでも破られていません。今では伝説ですよ。記録を見た時、正直信じられませんでしたが真戸上等から安室一等の話を聞いてようやく、信じられるようになりました。もしよろしければ、今度クインケ操術の指南をしていただけませんか？」
　なんと大げさな。まぁ俺はニュータイプだし？模擬戦で負けなしでスペシャルなのでオールドタイプには負ける筈ないんだよなぁ（ゴリラ連中は例外）
「大袈裟じゃない？まぁ運がよかっただけだよ。指南と呼べるか分からないけど、訓練ならいつでも付き合うよ。それより真戸さんとはうまくやれそう？見た目怖いけどいい人だから色々教えて貰いなよ」
　そう言うと。はぁ。となんとも煮え切らない返事をして、口ごもる亜門君。上手くやれてないんだろうか？気になったので、どうしたのか聞こうとすると真戸さんが話かけてくる。
「そう言えば巨腕のクインケの件だが、まだ時間が掛かりそうだ。SS相手と聞いているので、なんとかしたいのだが、色々新機軸の技術を詰め込んだのでな。時間が掛かると研究所から連絡が入っている。もし、必要であれば幾らか妥協すれば速められそうだが、どうだね？」
　正直、今はそこまでクインケに困っているという事はないので別にじっくりと作って貰って構わない。
「クインケは十分足りてるんで大丈夫ですよ。時間かけていい物作ってください!!
　それよりも！実は今回の相手SSレートの羽赫らしいんですよ!!是非とも倒したら、有馬さんのナルカミみたいなの作りたいんですけど、どうですかね？こう、ビームが撃てる感じの！」
　ジョッキに入っている酒を思い切り煽りながら、少し大声になりつつ真戸さんに相談する。
「いや、なんで所有権を貰えること前提で話してるんだよ。私だって

羽赫のＳＳっていうなら欲しいぞ」
　なにやら、隣で宇井先輩が所有権を主張してくるが、ダメ！羽赫は俺の！僕が一番クインケを上手く扱えるんだよ。
「宇井先輩がなんか言ってますが、どうですかね？ビーム撃てるの作れません？」
　真戸さんがお猪口を傾けながら幾らか考えて答える。
「ＳＳともなれば出力的には大体の物が作れるだろうが、やはり赫包の特徴等実物を見てからでなければなんとも言えんな。もし討伐できれば私に一報入れてくれないかね」
　無理ではないと。今回の任務は要するに、ＣＣＧの連中共競争になる訳だ。隣に座る宇井先輩すら。恐ろしい！
「宇井先輩！絶対に討伐しましょう！そんで所有権は俺のものってことで！」
　なんでだよ。と突っ込みを言われる。とそこで蚊帳の外になってる亜門君にも話題を振ってみる。
「亜門君ってどんなクインケ使ってるの？やっぱスクール主席ともなると、いいクインケ支給されるんでしょ？いいよなぁ～俺なんて支給されたのトマホークだよ？せめて刀剣類よこせよな」
「いえ、私もそこまでの物を支給された訳ではありませんが、それよりも安室一等と宇井上等は地下任務で張間と任務を共にしたとか。その際に張間が助けられたと伺いました。同期を救って頂きありがとうございます」
「張間？」
　誰だ？正直地下任務は入れ替わりが激しすぎて、全員覚えていられないのだ。それに酔ってるし、しょうがないね。
「ほら。お前が最後の地下探索任務で面倒見たあの女性だよ」
　隣から宇井先輩がフォローしてくれる。あぁ！丁度真戸さんと組む前の最後の任務で組んだあの子か。ごついクインケを振り回していたのでよく覚えている。
「あぁ、あの子ね！クインケの扱い上手いし、美人でいい子だったよ。しかし俺助けたっけかな」

「安室一等が喰種の奇襲をギリギリで知らせてくれたおかげで助かったと張間は言っていました」
　んー。声かけはいつもしてたから、まぁ助けれたのならよかった。
「まぁ助けれたのならよかったよ。地下じゃ死人なんて毎回でてるしさ。そーれーよーりーも、クインケの話をしよう」
　俺は気になるのだ。やはり、正規の主席ともなるとガンダムタイプのテストパイロットとかになってしまうのだろうか。
「クインケの話ですか。私はそれよりも捜査に関するお話を・・・」
「固いなぁ。捜査なんて追ってれば、あっちからくるんだから、そこまで固いこと気にしなくていいよ」
「それは・・・」
「喰種なんてクインケにしてなんぼだよ?俺はクインケの為に捜査官になったと言っても過言ではないね」
　俺はクインケの持論を酒の勢いでこれでもかと展開する。それに宇井先輩はうんざりし、真戸さんは興味深そうに聞いてくれたのだが、1名はどうやら違ったようだ。
　突如、怒声が響く。
「安室一等はそんな軽い考えなんですか!?クインケも大事でしょうが何よりも、市民を守り、喰種を早期に駆逐することが第一に考え優先すべきことです。そんな考えで捜査官になったと聞いて、俺は失望しました!真戸さんといい安室一等といいクインケのことばかりではないですか!?」
　真面目か。と突っ込みたい。
　中々の気迫で大声出すものだからびびっちまったじゃないですか
「お、落ち着け。ほらクインケあれば喰種討伐しやすいじゃん?倒せばそれでいいじゃん?ようするに効率的にね?」
　ビビったのと、酔っぱらってるせいで、自分でも意味不明の弁明になる。
「亜門君、落ち着けって。別に二人はクインケ目的で喰種を駆逐してるわけじゃないさ。ただ、興味が大きいだけで。喰種の駆逐について二人共十分に心得てるよ。・・・やり方はともかくとしてだけど」

宇井先輩がたばこをふかしながら、援護してくれた。
「うむ、もう少し柔軟に考えたまえ。喰種を駆逐することでどっちみちクインケは手に入る。我々にとってそれは報酬でもある。それを第一に考えたとして問題ではない筈だが」
「心構えの問題です！お二人にはがっかりしました。これではお二人共噂通りではないですか。クインケ狂いの真戸と安室。あくまでも噂だと思い信じず、二人共有馬特等のように真面目な方かと！」
いや、有馬さんも真面目かと言われると・・・と宇井先輩が呟くが、興奮している亜門くんには耳に入っていない様子である。うん。あの人もクインケ狂いなとこあるよね？
俺と宇井先輩がこそこそ有馬さんについて話していると。どうやらひとしきり怒鳴り散らしたのか。僅かに落ち着き、「今は、そのように真面目な話をする時間でもなかろう。ほれ飲んで落ち着き給え」
真戸さんが年長者の余裕か、特に亜門君の発言を気にせず、酒を勧める。
「いえ、結構です。私は失礼します。」
そういうと止める間もなく、立ち去ってしまう亜門くん。俺達3人は取り合えず、酒を口に入れつつ、仕切り直す。なんだかんだで、この二人は図太い。
「いやはや、最近の若者にしては中々頑固でね。安室君とは正反対の意味で扱いずらい。まぁ若気の至りというもの、あまり気にしないでくれないか？」
真戸さんが亜門くんについて、フォローを入れる。伊達に俺の無茶振りに対して、怒らなかっただけはある。仏みたいな人やで！
「私は気にしてませんけど、彼にも事情があるとは言え、真戸さんと安室の事情を知る身としては、少々癇に障りましたが。まぁ本人たちが気にしてないのでしたら、私は特に」
「？別に酒の席ですし。俺も特に気にしてないので真戸さんが気にしないならいいですよ？」
すまないね。真戸さんがそう言うと、3人で仕事の話をぼちぼちしつつ、真戸さんが最近の俺の行動について宇井先輩に話し始めた。そ

してジェイソンを単独で追撃したあたりで、相変わらずだな。などと宇井先輩が呆れながら言い、私と組んでる時にそんなことしたら、わかってるよな？とガチで脅されつつ、その後は真戸さんにも気を許したのか、宇井先輩の愚痴が始まりそれを聞き流しつつも、案外３人で楽しく飲み明かすことができた。

そして日が変わる前に明日も仕事だということで、お開きとなったのだった。

ちなみに後日、亜門くんがいきなり土下座で謝罪してきたことに衝撃を受けるのだが、それはまた、後日語ることとなる。

そして翌週になり、とうとう４区を拠点とするＳＳレート通称「天狗」を討伐するべく、宇井上等率いる対策チームの編成が完了した。その中には宇井と共に期待のホープである安室一等も含まれており、通称宇井班は本局内でもかなりの頻度で話題に上がることとなる。

上等捜査官にＳＳレートを任せることに不満や不安を覚える者も当然多くいたが、有馬特等と局長の一声で、一応は直接表に出す者はいなくなり、局内の注目を集める宇井班は天狗が拠点とする４区へと出撃したのだった。